

〔書評〕

G. Johannes Botterweck and Helmer Ringgren, ed.
THEOLOGICAL DICTIONARY
OF THE OLD TESTAMENT, Vol. I

John T. Willis, trans., Grand Rapids: Wm. B.
Eerdmans Publishing Company, 1974, pp. 479.

服部 嘉明

キッテルの編集による *Theological Dictionary of the New Testament* の第一巻が一九六四年に、英訳出版されてより、信徒研究者、神学生、聖職者、聖書学者をはじめとするキリスト教界は勿論のこと、他の方面からも聖書学及び、聖書神学（又は、思想）に関する信頼おける情報及び、資料提供源として重宝がられ、その全巻が広く利用され、親しまれて来た。それだけに、今回それと対照的に姉妹版的意図で出版され、英訳されたと考えられるこの旧約聖書神学辞典は、多くの人々に期待（又は、予期）されていたと言ってもよい。（しかし、この第一巻を見て、総括的に言い得ることは、余り期待し過ぎていた……という読後感をもたざるを得なかったことである。とは言っても、内容そのものは立派であり、各項目の執筆者の陣容からも知り得る如く、現在活躍中で、今後の活躍にも期待がよせられる年令層の専門学者が中心となっており、新約聖書神学辞典に

（勝るとは言い得ないが）劣るとは考えられない。むしろ問題となるのは、取扱ひ方、又は、展開の仕方と、それに関連する本書の機能、又は目的であろう。

本書第一巻では、ヘブル語アルファベットの最初のアレフで始まる四十五語と次のベスで始まる四つの語を各項目として取扱われている。従って、どのような理由でこれら五十三語が選択されたのか（例えば、*'al ram*, *'zn ear*, *'n mother* などはどうなのか）ということと共に、性格上或項目においては、神学的辞書らしい要素を充分に提示し（例えば、*'b father*, *'wr light*, etc.）、他の項目においては、極めて言語学的な取扱ひが明細になされている（例えば、*'dwn lord*, etc.）こと、基本的な問題を投げかけているように考えられる。即ち、神学思想を提示することを目的とするのか、それとも、言語学的情報資料を提供することを目的とするのか、である。もし前者が目的であれば、*man* という一つの項目又は、表題のもとで、幾つかの異なったヘブル語のもつ内容説明などからまとめて取扱う方が *'dm*, *'ys*, *'nws* などを別項目として（異なった二人の執筆者によって）取扱われるよりも妥当であろう。同じようなことは、或場合には、適当に派生語として一つの項目のもとで取扱われているのはよいけれども（例えば、*'yb*, *wyb*, *'ybh*, pp. 212-218 や *'ymh*, *'ym*, *'ymtn*, pp. 219-221, etc.）*'tr*, *hry*, *'hryt* など、三項目として別々に（三人の別々の執筆者によって）取扱われているのはどうかと思われる（pp. 201-212）。¹ (E), *'llym*

(Elonin) に関しても同じく別項目として、別々の執筆者によ

って取扱われているが、神学思想を主題的に考えるのであれば、一つにまとめて取扱われるのが妥当ではなからうか。もちろん、この種の神学辞典や、神学百科辞典では、主題を論じ、説明するためには、言語学的な資料の使用を避けることは、旧約聖書神学の性格上不可能であることは認められねばならない。むしろ、言語学的な資料を、充分に取り入れられるべきである。その点では、本書は充分言語学的資料を取り入れているのであり、長所とさえ言い得る。dawn, 'is, などは良い例である。

従って、内容そのものに関しては、既述の如く、総体的に高く評価されて当然であり、使用の如何によつては、極めて重宝である。それら長所と考えられる点を指摘すれば、次のようである。(1)コンコードダンス的な要素をもっている項目などでの取扱いは、特に、その項目の神学思想又は、概念の理解を求めようとする場合には、極めて適切に、単に聖書各書における引用回数のみでなく、その意味するところをも一応提示しているの

で、コンコードダンスと聖書辞典との調整的適用性があると言い得る(例えば、*יהוה* について、七九―八三頁)。(2)本書では極めて積極的に、聖書外の文献資料をも、聖書の神学思想をよりよく客観的にも把握し、一般文化との接触をも可能とする程に取り入れ適用している。(使用されたエジプト、アッカド、ウガリト、及び死海写本関係のテキストのリストはよくそれを示し

たヘブル語の字訳表はあっても、他にラテン文字に字訳(又は、音訳)されていないもの、ウガリト語及びフルリ語の *𐤏* 及び *𐤐* に適用されている二つの記号の字訳の付加が必要ではなからうか(例えば、六―七、四二、六〇、六七、三九二頁等)。(3)内容そのものではないが、本書の外装の第I巻の表示にそえて、ラテン文字の字訳表で、*abh-baddhath* と書かれているが、新約聖書神学辞典の如く、*bddth* とヘブル語の表示そのものを書き入れるか、或は、書き直す必要があるのではなからうか。

いずれにしても、未だ第I巻が英訳として筆者の手にあるのみなので、今後の進展がこの書の出版上どうなるかは、後続する第II巻以後を見てから評価されなければならない。とにかく、より広い範囲で(新約聖書神学辞典の執筆陣容に比べて)執筆者が本書の執筆に参加していることも、辞典としては歓迎されることであり、先に英訳出版完成をみたキツテルの新約聖書神学辞典とともに多くの人々によって併用されることであらう。

(大阪基督教短大・神学院教授)

ている。p. XVIII)。(3)キツテルの新約聖書神学辞典において、旧約関係の説明が必要である場合、又はそのような項目の場合には、O. Procksch, V. Herrlich, G. von Rad, W. Zimmerli などの旧約学者が執筆担当したのに比して(少なくとも今回の第I巻に限る限りでは)比較的年令的には若手の学者が主として執筆しているようであり、全体的に最近の新しい文献資料(考古学、言語学などの最近の成果を含めて)にも基づいて情報を提供している。また、未出版の学位論文なども適用していることにも注目される(八七、二四三頁等)。(4)各項目の性格にもよるけれども、取扱ひ方を一定化せず実質的な情報提供を目的として有機的に展開の方法を変えたりし、新しい見出しなどを付して説明している(例えば、三〇―三四、二九、一二二頁等)。(5)上記の点と類似することかも知れないが、或項目、特に固有名詞的なもの(例えば *יהוה* アブラハム、五二―五六頁)は、(旧約)歴史の背景を知るのにも益となる展開の仕方がなされていて有効である。

これらは、本書の利用者の使用法如何によつて長所として挙げられ得るけれども、細かい点でなお改良が望まれるのは、次の諸点である。(1)言葉の説明をするに当って、ヘブル語の語幹をそのまま *Gal, Piel, Hiphil, Niphal* などの専門用語をそのまま本文で使用しているが、ヘブル語のラテン文字への字訳表や、母音記号表(pp. XIX―XX)と同様に一応、説明される必要がある(例えば、二二―二三、二九四―三〇九頁)。(2)ま

D. J. Wiseman, ed.

PEOPLES OF OLD TESTAMENT TIMES

Oxford: Clarendon Press, 1973, pp. 402, VIII plates.

津村 俊夫

本書は、ロンドン大学アッシャー学教授の Donald J. Wiseman 博士が英国旧約学会 (the Society for Old Testament Study) のために編集した「旧約時代の諸民族」に関する論文集である。「まえがき」で述べられているように、これは *Documents from Old Testament Times* (1958) と旧約学会の五十周年記念出版である *Archaeology and Old Testament Study* (1967) に続く、旧約聖書の史的背景に関する三部作の最後のものであり、本書の計画は前二書の編者である故 D. Winton Thomas 教授に負っている。この度、堅実な福音的学者 Wiseman 教授が選ばれて編集しているという事実は、英国での聖書の実証的な研究の伝統が正しく受け継がれていることを示しているだけでなく、彼をはじめとする福音的諸学者——本書では D. J. Wiseman, A. R. Millard, K. A. Kitchen, H. A. Hoffner 等——がそれぞれの専門分野で大きな学術的貢献をしていることを例示するものであらう。

本書には、欧米七ヶ国の十四名(英一八名、米・加・仏・伊・イスラエル・スウェーデン各一名)の学者による諸論文があ

る。序章「諸民族と諸国民」(D.J. Wiseman)のあと「ヘブル人」を H. Cazelles が、「カナン人」を A.R. Millard が、「ペリシテ人」を K.A. Kitchen が、「エジプト人」を R.J. Williams が、「アモリ人」を M. Liverani が、「アラム人」を A. Malamat が、「アッシリア人」を H.W.F. Saggs が、「バבל人」及び「カルデア人」を W.G. Lambert が、「ヒッタイト人」及び「フルリ人」を H.A. Hoffner が、「モアブ人及びエドム人」を J.R. Bartlett が、「フェニキア人」を D.R. Ap-Thomas が、「アラブ人及びエチオピア人」を A.K. Irvine が、そして最後に「ヘルシア人」を Geo Widengren が、それぞれ担当している。

本書の目的は、一九二五年に英国旧約学会より出版された、A.S. Peake, ed., *The People and the Book* 以後の新しい学的成果にもとづいて、旧約時代にイスラエルの民と関わりを持った諸民族についての現時点における知識を提供する事によって、旧約聖書の教師及び学生の必要に応えることにある。従って、旧約本文と聖書外諸資料とから諸民族の歴史・言語と文学・宗教・法律・社会・経済等が究明されている。各章の終りの注と参考文献は、巻末の諸索引とともに、非常に有用である。序章「諸民族と諸国民」で、D.J. Wiseman は「民族」を、共通の家系、歴史・伝承・文化・習慣・言語を有する共同体社会に属するもので、しかも一定の地域を占めることがあるものと定義する。「言語」は民族を区別する一つの手段ではあろう

が、言語学的証拠だけに依存して民族学的結論を引き出すことは、Wiseman も指摘するように、危険であらう。言語を根拠にして旧約時代の諸民族を「セム人・ハム人」(Semitic-Hamitic)と分類するのが現代の学問的傾向であるが、シュメール人、フルリ人、エラム人等のとき、必ずしもその帰属が明瞭ではない民族も存在するのである。

さらに、ヘブル人を含む諸民族及び諸言語のほとんどに、「複合的諸要素」が認められると Wiseman は考える。例えば、申二六・五、エゼ一六・三、出エ一八・一一、一サム七・一四、ヨシュ九・三。そして、「国民」の弁別をその主目的としている「諸国民の表」(創一〇)も同じく複合的な構成をなしている事に注目している。この表は言語・地方をさほど強調してはいないで、家族又は「氏族」——国民の区分として——に焦点をあてているようである。「人種」という見方が省かれているが、人類の統一性を示す事が全体として目論まれている。Wiseman は、「子孫」という用語を P 資料に、「生んだ」(例えば、八・一二節)という用語を J 資料に帰するところの文書資料説を非常に疑わしいものと考えている。これらの用語は、政治的盟約関係を示していると考えられるからである。Wiseman によれば、この「諸国民の表」は、所謂紀元前七世紀のものでなく、モーセ時代(紀元前十四世紀)にまで遡りうるものであり、それは民族学的というよりむしろ民俗学的又は民族地理学的記述である。しかしながら、ヤベテ・ハム・セムをそれぞれ

北西部・南部・中部というように単純な地理的区分がなされているのではない。エラムがセムの子孫に含まれているのは地理的近さの為であるが、ルデ・シエバ・ハビラがセムとハムの両方の子孫のうちに現れているのは、結婚による同盟関係を意味しているからである。又、「エベルの子孫」の全てがセム系と分類されているのは、エベルが恐らく最も広義の半遊牧民としての「ハビル」のこゝを指しているからであらう、と Wiseman は説明する。

ヘブル人「Wiseman はヘブル人とイスラエル人とは必ずしも区別して考察してはいない」は、「外国の民」を通常その言語によって区別している(例・エゼ三・五一六、イザ三三・四一九、詩一一四・一)が、特定の地域・神(例えば「ケモシユの民」民二・二九)・習慣によって表現する時もある。メソポタミアでは、外国人のことを「Xの地／都市から来た人」と呼び、必ずしも民族的記述を伴っていない。「都市」にては、部族的関係がほとんど重要ではなくなっていたのである。ヘブル王国の成立後、イスラエルでは種族又は氏族団による諸民族の明確な区別は消滅し、中央集権的政治体制が強調された」と Wiseman は説明する。にもかかわらず「非市民」のグループ、即ち「在留外国人」が存在した理由は、彼の指摘するように西方オリエントでは遊牧民達の間で継承されていた「もてなし」の慣習があったためであらう。

ヘブル人は、Wiseman によれば、アブラハムの家系に属する

40

と主張する諸々の「家族」・「氏族」・さらに大きな「親族」・「氏族団」を通じて互いの姻戚関係を意識したのである。彼らは、血族関係の絆と譲渡できない土地保有権という点で、社会の最も安定した構成単位であった。しかし、これらの諸家族又は「氏族」——諸「支族」でなく——が更に大きく分類されることが強調されたのはシナイ契約によってであった。この契約が、イスラエルが「国民」として誕生する最初の主要な段階であったのである。この契約締結は、Wiseman によれば、イスラエルを契約の民とした「出エジプト」贖いの概念に根ざしており、国民である為に必要な諸要素——共通の習慣・政府・特定地域・宗教的関心と実践——を提供した歴史的根拠なのである。更に、シナイ契約は、アブラハムの時代(創一二・一二三)に遡る所の、ヤハウェによる民の選びへの保障のしるしである、と Wiseman は考える。このように Wiseman は、vonRad, Noth らの伝承史的方法論に対して暗黙の中に彼らの仮説を否定しているのである。ヘブル人は、彼らを取りまいている他の諸民族——その存在は彼らにとって絶えず誘惑であり、時には彼らの霊的且物質的存在に対する恐れであったのである——に不断の関心をいだいていたのである。それらの諸民族が本書の主題なのである、と Wiseman は説明する。

第一章「ヘブル人」で、Cazelles は、「ヘブル人」と「イスラエル人」とを一応区別して考察するのが史的研究において重要であると主張する。旧約聖書中、「ヘブル人」という語は主

としてエジプト人との関係(創三九・一四、出エジ一〇・三)とペリシテ人との関係において(一サム一四・二一、一三・三―七)現われており、サウル王以後は、実質上「話し言葉」から消え去ったと言える。現在、「ヘブル人」が民族の実体ではなく社会学的カテゴリーであると説明する立場(e.g. Bottero, Greenberg)と、イスラエル人たちよりも「より広い範囲」の住民であるとする立場(e.g. Koch)とが存在する。Cazellesによれば、「ヘブル人」という語は、「ヘブル人自身から聖書の語いに入ったのではなく、エジプト人とペリシテ人とがアジア人である外国人に対して用いた用語から入ったのであろう」という事である。

(i)「Hapiru/Hapiru の発見」と(ii)「Hapiru/prw の展開・活動・地位」とでは、約十三頁に渡り、Bottero 及び Greenberg の研究以後の新データ(シュメール、ヒッタイト、ヌジ、ウガリト、アマルナ、エジプトよりの)に基づいて「ハビル」の歴史的・地理的証拠が論述されている。(iii)「Hapiru/prw の起源と特質」で語源に関する諸説を紹介し、Cazelles は「Alalah 及び Nuzi のようなフルリ人社会に多数のハビルが存在している事実から、ハビルを語源的にフルリ語の ewri/epri/ihri “Jord” と結びつける。そして、「ハビル」が元来「フルリ人の軍人貴族」であったと説明する。(iv)「Hapiru とヘブル人」は、Cazelles が Weipert による「カナン定着に関するメンデンホルン仮説の批判を支持し、イスラエル人は「Hapiru」と同一視できない事、

また、イスラエルのカナン征服をカナン人の諸都市に対抗する「農民の反乱」のたぐいと看做する事はできない事を主張するのは正しい。Cazelles によれば、イスラエルの民がカナンに浸透した時、そこにフルリ人の軍人貴族の残りを見出したのである。又、軍人アブラムを扱っている創世記十四章の「ヘブル人アブラム」は、彼が「典型的なアマルナ文書タイプのハビル」である事を示している。しかし、これは編集者がイスラエル以前の時代を喚起する意図をもって記したものであると Cazelles は説明する。

(v)「結論」は現時点では極めて仮説的であるとして、Cazelles は、「ヘブル人」が「ハビル」(又はアビル)と同一視される事、彼らが民族的集団というよりむしろ社会的現象である事、この「階級」がフルリ人と結び付きうる事、彼らはメソポタミア上流に紀元前三千年期の末頃軍人貴族として出現し、エジプト人がカナンを「フルの地」と呼んだ頃にカナンに下った事、しかし彼らはフルリ人とは同一にならないで存在し、フルリ人が紀元前二千年期の末に消え去るのと同じ頃に彼らも明確な集団としては存在しなくなった事等を述べている。他方、「イスラエル人」たちは、「ハビル」との或る共通の状況、特にペリシテ人及びエジプト人との関係における地理的絆を意識していたが、自らをハビルと同一視する事はなかったと結論する。Cazelles のこの論文は、「ハビル問題に関する現況を理解する為に非常に有益であり、興味深い提案を含んでいるが、そ

の「フルリ語語源説」は必ずしも説得的とは言えない。確かに、Kitchen の言うように、「ヘブル人はハビルであったかもしれない——語源的に共通している——が、全てのハビルが聖書のヘブル人であるのはな」ことは明らかである。[K.A. Kitchen *Ancient Orient and Old Testament*, pp. 69-70]

第二章「カナン人」(A.R. Millard)と特に注目すべき点は、カナン人とアモリ人との関係についてである。K. Kenyon によれば、中期青銅器時代 IIa(前1800—1650年)の新文化は、シリアの沿岸に至ったアモリ人が Byblos の高度な文明に圧倒されて、その結果生じた「融合」文化を西方シリア・パレスチナ全土に拡散していったために起ったのである。そして、この文化が「カナン文化」と呼ばれる所のものであり、「カナン人」とは「都市化されたアモリ人」のことであると Kenyon は説明する。この大胆な仮説に対して種々の反論がなされたが、いずれも完全に満足であるとは言えず。Millard は「アモリ人が新しい概念又は技術を伝えたという事は非常にありうることであるが、物質的進歩に大いに貢献したであろう」ということは疑わしいと言う。ただ、この新文化が、遊牧民が都市民に徐々に変質していく事によって生じたというよりむしろ「侵入」という事実によるものである点には、考古学的裏付がある。

他方、Liverani は第五章「アモリ人」で、アモリ人とカナン人とは二つの民族に分けられるべきではないと主張している。彼によれば、それ迄「アモリ人」という語で言及されてい

た住民を指すために——少なくとも部分的に——紀元前二千年期の半ばから「カナン人」という語が使用されるようになったのである。しかし、最近発表されているマリ文書のうちに「カナン人」が言及されている [Syria 50 (1973) 277-282] 事実からしても、カナン人とアモリ人との関係はそう簡単に結論し得る問題ではな。Millard が言うように、「カナン」という語が、本来地域名であったのか民族名であったのか今もって決定できないのである。

次に、Millard が「ウガリトの豊富なデータを典型的にカナンの的であるとして扱うことは危険である」と指摘するのは正しい。確かにウガリトは、厳密には「カナン」の地の一部ではないし、ウガリト文書には「カナン人」を他国人扱いしている記述がみられる。「更に昨年来大量の粘土板が発掘されている Ebla も、地理的には「カナン」に属してはいない」しかし、宗教・文化の現象に関しては、特に紀元前二千年期の半ば以降のアマルナ時代には、「カナン」的」という語を余り狭義に解しすぎてもいけないと思われる。Millard は(ii)「カナン」のイスラエルへの影響」で、「聖絶」は主なる神の命令であるが、その地の物質文明までも破壊せよという——エリコのような特別な場合を除いて——ことではない点に注目している。カナンの影響が最も強く及んだ分野は言語と宗教であるとよく言われているが、言語の類似性は自動的に思考形態の移転を意味するのではなく、セム語の慣用語法における共通性であって全く言

語的現象である。そしてイスラエルの信仰の独自性は、カナンの宗教要素をむしろ「邪魔もの」扱いにしたのである、と Millard は説明している。

第三章「ペリシテ人」で、Kitchen は、ペリシテ人が Ramesses III の時代（前一二〇〇年頃）にだけレバントに突然たどりついたのではなく、その百五十年も前よりペリシテ人を含む「海の民」がカナンに到着していたこと、しかし旧約聖書の著者は、彼らエーゲ海文明の諸民族を彼らのうちのただ一つの民族名、「ペリシテ人」で表現したことを述べている。エーゲ海とカナンとの関係は中期青銅器時代よりさかんであった事実からしても、創世記二一、二六章で言及されている「ペリシテ人」は単なる anachronism ではなく、申命記二・二三の「カフトール人」のとき、より初期のエーゲ海民族に対して紀元前一三一二世紀の語り手によって使用された用語である、と Kitchen は説明する。その証拠に、族長時代のペリシテ人とダビデ時代のペリシテ人とは、相異なる姿として聖書に描かれているのである。旧約聖書では非常によく知られているペリシテ人であるが、同時に最もわかりにくいのもこの民族である。考古学的資料が言及していないからといって、聖書の記述の信ぴょう性が疑われたりする事があってはならない。Kitchen のいみじくも言うように、「Negative evidence は通常は証拠ではないからである」[Kitchen, AOOT, p. 30]。

以上、本書の内容の一部を検討・論述したにすぎない。一次

者としての独創性だけでなく教師としての練達には深い感銘を受けた。ウガリト語の Loren R. Fisher, Michael M. Astour, Anson F. Rainey, コッタイン語の Harry A. Hoffner, マンリン語の Jack M. Sasson, トンニ語の Edwin Yamauchi, その他多くの旧約学者が彼の下で訓練された人々である。また教授は福音的な立場に立つ学者に同情的であって、米国の福音主義諸神学校の教師たち、例えば、故 Edward J. Young, Meredith Kline, Elmer Smick, William LaSor, Laird Harris, Dennis Kinlaw, Walter Kaiser 等々との門下で学んだ学者であることはよく知られている。

筆者は、この度『聖書以前』に続いて本書が邦訳されたことを喜ぶ者の一人である。本書は Cyrus H. Gordon, *Ugaritic and Minoan Crete: The Bearing of their Texts on the Origin of Western Culture* (N.Y.: W.W. Norton, 1966) の全訳である。その副題より明らかのように、これは、ウガリトとミノア期クレタとの両方より出土した諸文書が、西洋文化の起源について何を語っているかを明らかにしようとしている。ゴードンによれば、紀元前一五〇〇年頃迄には、ギリシャ、ウガリト及びイスラエルはすべて同一の文化圏に属していた。そしてミノア文字の諸碑文は、当時フェニキア語が最も重要な言語的・文化的要素であったと確定しつつある。本書で、ゴードンは特にウガリト文書そのものに重点を置いているが、それは、ウガリト文学が初期のギリシャ及びヘブルの文学の起源と本質との

資料にもとづく実証的研究法とその成果について本書から学ぶことの意義は日本の旧約学界の現状に照して考えると非常に大きいといえよう。

（聖書神学舎教師・筑波大学講師）

C・H・ゴールドン著 高橋正男訳
『ウガリト文学と古代世界』

一九七六年 日本基督教団出版局

津村 俊夫

著者サイラス・H・ゴールドン博士は、現在ニューヨーク大学のヘブル学教授であり、その学識と業績は欧米の学界で広く認められている。〔著者についての詳しい紹介は、柴山榮氏によりゴールドン『聖書以前』（みすず書房、一九六七年）の「訳者あとがき」でなされているので、ここでは省略する。〕日本の学界には、一九七四年五月の日本オリエント学会第十六回大会の時の創立二十周年記念講演、「古代オリエントにおけるウガリトの重要性」〔オリエント第十七巻（一九七四年）〕によって、さらに広く知られるようになった。

筆者は、ゴードン教授からその前任校ブランドイス大学大学院地中海学研究科で四年間薫陶をうけることができたが、教授の学

解明に光を投じていると考えるからである。

以上のような「ウガリト」と「ミノア」の両文書に基づいた東地中海文明に関するゴールドンの学的関心は、彼の *Homer and Bible: The Origin and Character of East Mediterranean Literature* (1955) で大胆に示されたが、一九六二年の *Before Bible: The Common Background of Greek and Hebrew Civilization* [邦訳『聖書以前』——一九六五年に改訂——で更に発展させられている。一九六六年出版の本書 (*Ugaritic and Minoan Crete*) は、彼の *Ugaritic Manual* (1955) の改訂版として出た *Ugaritic Textbook* (1965) [=UTと略す] の数ヶ月後に出現したものであり、その一二ヶ月後には「ミノア語に関する専門的記述 *Evidence for the Minoan Language* (1966) [=EMLと略す] が出版される。この度訳出された本書は、ゴールドンの専門とする——いずれも一次資料の操作・分析・総合を土台としている——これら二つの学問的分野を彼の巨視的な歴史観により総合しようとする試みの一つの現われである。

第一章「ウガリトとその重要性」では、ウガリトの地理的・文化的・時代的重要性について述べ、「カナンとエーゲを結ぶもの」としてのウガリトの役割を強調している。

第二章「ウガリト文学とグレコ・ヘブライの類縁関係」では、ウガリトが、言語と文学において旧約聖書と最も緊密な関係にあるだけでなく、クレト叙事詩におけるハトロイアのヘレ

ネー・モテ・イーフを通して、ウガリト文学が『イーリアス』と創世記との間の間隙を埋めるものであると論じる。

第三章「ミノア文明期のクレータ」で、ゴードンは一九六二年以降の自らのエテオクレータ語解説の成果に基づいて、ウガリトとミノア期クレータは、言語的・宗教的・文化的に同じ北西セム語の領域に属していたと主張する。「彼自身による線文字Aの解説に至る迄の個人的経験と経過についての詳述は、*Forgotten Scripts* (1968, 1971) 第七章にある」そして、「ミノア文書がウガリトとギリシャとの間の間隙を埋め、北西セム人は、歴史に記された最初のギリシヤ文化、即ちミヌケーナイ文明の為にミノアの諸基盤を備えたと言っている」。

第四章「ウガリト詩歌」は、本書の約三分の二を占め、最も重要な部分である。これは、*Ugaritic Literature* (1949) [≡*UTL*と略す]で訳出したテキストの改訂版であるが、その全てが本書に現われているわけではない。本章には、*△バアルとアナト* 神話群 [テキスト (*UT*) 129, 137, 68, 44, 51, 67, 62 + 49, 76, 132, 75]、*△良き神々の誕生* [UT 52]、*△月の神の結婚* [UT 77] 及び二大叙事詩、*△ケレト* と *△アカット* が訳出されている。これら以外に、*PRU II* (1957), *V* (1965) [UT 1001~1189, 2001~2172]、*Ugaritica V* (1968) [UT 601~614]、その他の諸文献が出版されている。しかし一九七三年に発見された約七〇の粘土板も、いまだにその出版が待たれている状況であって、ゴードンがいみじくも「ウガリトの大

部分はまだ発掘されずにいる。ことによると、さらに多くの書板が発見されるであろう」(二二六頁以下)と言っている通りである。「本章の註の部分は、彼も言う如く非常に大切で、ゴードンの本文解釈の立場をよく知る事ができる。但し、テキストの和訳は、英語よりの二重訳であるため厳密な意味を正しく伝えていたとは限らない」。

第五章「ウガリトの散文テキスト」は、ウガリトの歴史事情について述べ、ややもすれば詩文テキストの重要さの故に軽視され勝ちな散文の行政文書(主としてアッカド語とウガリト語による)に注意を向けている。

以下に、本書の内容に関して、現在のウガリト学の成果に照らして若干の批評を試みたい。まず、バールとモートの闘争が毎年のもなのか、七年周期のものなのかという論争は、ゴードンが一九四九年のULにてこのことを論証し、この見解は徐徐に受け入れられつつある(四九頁、注一三)と言うほどには定着していない。要は、二者択一の事柄でなく、神話と儀式との関係の理解にかかわっている問題である。[Johannes C. de Moor, *The Seasonal Pattern in the Ugaritic Myth of Ba'ilu* (1971) を参照。]

また、ゴードンによる「シャルム」(一五四頁) (*šm*)、*「ルート」* (一五五頁) (*rd*)、*「はるる」* (九八、一〇三頁) (*gd*) 等の訳語は、*UT* の *Glossary* (それぞれ §19, 2487, 19, 1814, 19, 579) では、そのような訳はあげられていない。*šm* を「ル

リ人の神シャルム」とするのは音韻論的に不可能である。[筆者の「ウガリト文書、UT 52 の解釈に関する方法的諸問題」、『オリエント』(一九七四年) 参照]ゴードン自身、*UT* の第三分冊 (*Glossary*) の改訂を最後にした為、このような相違が生じた事を承知していると思う。

次に、「そこぞ、ダネル、ラパのひとは、祈る」(二一〇頁)では、前後関係が明瞭でない。語根 *šly* には「祈る」という意味よりもむしろ「呪う」という意味が確認されている。[*Ugaritica V* の RS 20.149 : III : 16、参照] ゆらに、「そして播かれた地の番兵がかれらに会う」(一五九頁)は、ウガリト語原文ではむしろ、「そして彼らは八播かれた地の番兵Vに会う」となっている。[又、「エールの愛」(一一三頁)は、「王、エールの愛」(*il mlk*) が正しく、「バアルは、かれが嘆願してゐる間に近寄り」(一九五頁)の直前に、「Behold, on the seventh day」が抜けている事を指摘しておこう。]しかし、これらはウガリト語テキストの解釈の困難さを物語るものであって、ギンズバークがいみじくも次の如く言うとおりである。「ウガリト語文献の訳出に直接あたった者で、いまでも間違いをしながらものは、結局その者が本文自体を研究した事がないからである」。

ウガリト語テキストのゴードン訳、ドライヴァー訳、ギンズバーク訳、アイストライトナー訳という、英語・独語への訳出が、——特に問題の個所で——全て一致することはほとんどな

い。それは、彼らのとっている方法論が重大要因となっているからである。ゴードンは、アラビア語等に依存した語源的解釈を極力避け、コンテキストによる解釈を非常に重視している。並行法の理解が詩の構造を把握するのに不可欠であるが、ウガリト文書の解明に際し、ゴードンがその事を強調するのは極めて正当である。

本書の註の部分(二二九—二二二頁)で、ゴードンは、重複 (*duplicates*)、反復 (*repetition*) 及び二重の名前 (*double names*) の現象を文学的特徴であると説明し、それらを異なる資料の融合によるとする、所謂文書資料説の立場を完全に否定している。この文学的特徴という事実の前に、JEDP という資料仮説は立ちえないと言っているのである。事実 (*facts*) が学説 (*theory*) をコントロールすべきであって、その逆であってはならぬ。ゴードン教授による指摘は大いに注目すべき点である。

最後に日本語の訳文について、いくつかの点にふれておきたい。まず、複合の名前、例えば *Kothar-and-Hasis* は鉤括弧に入れるべきであるが、括弧が省略されることになった「九頁「凡例」参照」為の不都合が生じている。「コシヤルとハシス」は通常は、複合名として単数扱いであるが、二〇〇頁の「コシヤルとハシス」は二人の神々である。逆に、「カディシユとアムラルは抱き合う」(一二二頁)は、「一見、二人の神々のようにみえるが、実際は複合名(単数)」で、「ハカディシユとアム

ラルVは、(アシエラを)抱いて」という意味が正しい。

人名・地名・神名等の表記について、「原則として慣用にしたがったが、必要と思われるものは原音に近く表記しよう」と努力(一〇頁)された由であるが、ゴードンが本書の原文にて vocalize していない名前は、その通り子音のままで表記(ローマ字で)すべきではないだろうか。例えば、Rp (ラハ)、Lipn (ラハハ)、Pbl (ハハル)、Hbr (フフル)。「確かに、ゴードンは『聖書以前』では、これらを母音付きで記しているが、本訳書にて Ynan を「ヤマン」——正誤表による——と、Hkpt を「ハクハト」と発音する正当な根拠はないと思われる」更に、「ソール・エール」は「シヨール・エール」とすべきであろう。ウガリト語の音は、英語では H と表記されているが、北西セム語の音韻対応法則によると、H はヘブル語の S アラム語の Š に対応する。もし Kothar (Ktr) を「コシヤル」、Asherah (ātr) を「アシエラ」、Astarte (ttr) を「アシユタロテ」、Tha' を「シアア」と、それぞれ表記するのであるならば、Thōr-EI は「シヨール・エール」でなければならぬ。同じ理由で、「アスタル」は「アシユタル」(Athar)、「アタル・ベアル」は「アシヤル・ベアル」(Ahar-Baal) とすべきではないだろうか。

「リウエル」(口語訳)〔五六頁〕は、エジプトの神 Re の要素を見ようとするゴードンの論述からすれば、むしろ「レウエル」であるべきで、その方がヘブル語 re'ūel に近い。又、「下

ウンとダスク」(三五、一五八頁)は英語の音訳で、「夜明け」と「黄昏」と訳出すべきである。「ラーマイ」(Rahmay)及び「アルサイ」(Arsay)「ヤッシブ」(Yasib)は、それぞれハ音と S 音という強子音を含んでいる故、「ラハマイ」、「アルツァイ」、「ヤツツイブ」としなければならぬ。『聖書以前』で「ラーマイ」、「アルサイ」、「ヤッシブ」となっているのは、その英語本文では印刷上 diacritical marks (区別的発音符)が省かれている為に、Rahmai, Arsay, Yasib をその通り誤って読んだからである。しかし本書では子音が正しく表記されているので問題はない」さらに、「ヒツタイト語」は、dh は印欧語の単子音を表わすのであるから、Tudhaliya は「トゥダハリヤ」(二四八頁)ではなく「トウダリヤ」である。

次に、「カデシユ」(「神聖」の意)はアシエラのこと(二三七頁、注六九)は、英語原文のとおり「Qds (「神聖」の意)は……」とすべきであろう。qds を語根とし「神聖」の意味を有する抽象名詞(女性形)は qads であって qds ではないからである。また、「妻たちとわたしは結婚し」(一五九頁)及び「おお息子たちよ、わたしは子供たちを産んだ!」(同頁)は、共にハムラビ法典に出てくる *awāt iqbu* 構文であって、「コンストラクト+定動詞」の型をもつ特殊構文であるから、ゴードンによる英訳の通り「わたしの娶った女たちは……」及び「おお、わたしが産んだ息子たちよ!」と訳出する必要がある。

更に、ウガリトの詩形論、例えば chiasm, ballast variant,

ellipsis など並行法に特有の現象には特に注意が払われるべきであろう。例えば、「良き者は賛える、然りかの女は歌う」(二〇三頁)は、「良き者は賛える、然りかの女について歌う」(ybd. wyšr 'lh/n'm [n 2Aqht VI: 31-32]) となるべきである。また、「かの女はかれの食欲をおいせ食ひをせ」/「かれの食欲を欲せ」(一九〇頁)は「His appetite she opens to eat/His desire to dine か」/「she opens」が後半に ellipsis となつて左下に注目すべきである。さらに原文の語順では「she opens」(tph)が前半句の終りに来よう、「His appetite to eat」(npsh. lilm)+「she opens」(tph)が「His desire to dine」(brth. lrm)によってランズをなす。即ち後半は tpht が ellipsis されて、その代りに npš が brt など ballast variant によって置換されているのである。しかも前後関係から判断すれば、ケレトが「食ひる」行為そのものは後の tpht であるから、「食欲をおいせ食ひをせ」(上記)より訳は不適当である。最も新しい訳 [A. Caquot et al, *Textes Ougaritiques I* (1974), p. 570] によれば、「elle ouvre sa gorge à la nourriture/son gosier au repas」(lit. «pour manger»/«pour se nourrir»)となっている。tpht は「次の如く邦訳『ゴードン訳に従って』すべきではなからうか、「彼女は彼の食ふたいと思う欲望をおこす/彼の食したいと思う欲求を」。

「あとがき」の文献紹介のところで PRU 3, 4, 6 が挙げられているが、それらはアッカド語文献集であって、ウガリト語

固有のテクスト集ではない。また PRU 5 (1957) は一九六五年の誤りであることを指摘しておこう。以上の如き諸問題はあがあるが、これらの非常に難解な訳出を、この迄精力的に完成された訳者の労を多とした。[なお、モートン教授の学術貢献の重要な部分については *Forgotten Scripts: The Story of their Decipherment* (Penguin Books, 1968, 1971) があるが、この書は現在筆者により訳出中で、近く社会思想社・現代教養文庫より出版の予定である。]

(聖書神学全教師 筑波大学講師)

Robert Banks, ed.

RECONCILIATION AND HOPE

—New Testament Essays on Atonement and Eschatology

William B. Eerdmans Pub. Co., 1974, pp 317.

山口昇

本書はオーストラリアが生んだ著名な新約聖書学者、レオン・モリスの六十才の祝賀献呈論文集である。全体は二部に大きく分けられ、第一部としては、題名が示している「和解」という主題のもとに十篇の論文が収められ、第二部は「希望」と題して九篇の論文が収められている。それに、巻頭にモリスの近

影、編集者の前書き、それにレオン・モリスを紹介するD・フバード(フラー神学校の学長)の短文と六頁にわたる比較的詳細なモリスの業績のリストが付け加えられている。十九名の論文の寄稿者は、地元のオーストラリアだけでなく、カナダ、ドイツ、英国、オランダ、スコットランド、南アフリカ、スエーデン、米国など、広く各地に及んでおり、モリスの学殖が、いかに多くの国々の学者たちによって評価されているかを如実に示している。

彼はケンブリッジ大学でPh・Dを得て、オーストラリアのリドレー・カレッジの副学長をつとめ、後にケンブリッジのティンダル・ハウスの所長に就任し、在職三年にして、一九六四年以後リドレー・カレッジの学長をつとめている。彼は出世作として一九五五年にThe Apostolic Preaching of the Cross を発表した。その後一九六五年にはThe Cross in the New Testament を出版し、その名声を動かさるものにした。これらの著作によっても知られるように、彼はパウロを中心としながら新約聖書全体にわたって贖罪に関する用語と思想の研究をしてきた。これが今回の献呈論文の前半の部分が「和解」と題された理由である。

その後彼は黙示録の注解書を一九六九年に出版した。これは二六三頁という、たいして大きな本ではないが、要点をしっかりと捉えて、穩健な立場から書かれた、すぐれた注解である。同年に *Studies in the Fourth Gospel* (『福音主義神学』) 一

書評がある)も出版された。この書のある部分は、一九六一年に評者がフラー神学校に留学しているとき、同校においてモリスが行った特別講義「最近におけるヨハネ伝研究」においてなされた講義がもとになっている。約十年かかって彼は想を練り、研究を重ねて、ようやく一書にまとめて刊行されたことを思うと、学究としての真摯な態度に心が打たれる。しかし、これは彼にとつてはさらに大きな仕事のための準備段階にすぎなかった。一九七一年には、実に九三六頁というぼう大な量になるヨハネ福音書の注解を、彼は刊行したのであった。この書は多くのヨハネ福音書の注解の中でも、福音派が後世に誇り得る、まことに偉大な労作である。このあと、彼は一九七二年にApocalyptic という、わずか八七頁の小冊であるが、まことに時機を得た小著をもっている(この書の書評は『福音主義神学』5を見よ)。このようなモリスの業績と関連して、本書の後半の「希望」と題された部分には、ヨハネ文書や終末論、黙示文学に関する論文が集められている。

さて、本書の内容を紹介するために、まず収録されている論文の寄稿者と、その題名を上げよう。

- 1 Birger Gerhardsson, "Sacrificial Service and Atonement in the Gospel of Matthew."
- 2 John Painter, "Eschatological Faith in the Gospel of John."
- 3 F.F. Bruce, "The Speeches in Acts Thirty Years After."

- 4 E. Earle Ellis, "Christ Crucified."
- 5 Herman N. Ridderbos, "The Earliest Confession of the Atonement in Paul."
- 6 Günter Bornkamm, "The Revelation of Christ to Paul on the Damascus Road and Paul's Doctrine of Justification and Reconciliation."
- 7 Ralph P. Martin, "Reconciliation and Forgiveness in Colossians."
- 8 James D.G. Dunn, "Paul's Understanding of the Death of Jesus."
- 9 Richard N. Longenecker, "The Obedience of Christ in the Theology of the Early Church."
- 10 I. Howard Marshall, "The Development of the Concept of Redemption in the New Testament."

以上が第一部に属し、第二部は以下の通りである。

- 11 Robert Banks, "The Eschatological Role of Law in Pre- and Post-Christian Jewish Thought."
- 12 Robert Maddox, "The Function of the Son of Man in the Gospel of John."
- 13 D.W. Palmer, "The Resurrection of Jesus and the Mission of the Church."
- 14 C.E.B. Cranfield, "Some Observations on Romans 8: 19-21"

- 15 D.W.B. Robinson, "The Priesthood of Paul in the Gospel of Hope."
- 16 J. Davis McCaughy, "The Death of Death (1 Cor. 15: 26)."
- 17 William J. Dalton, "So that Your Faith may Also be Your Hope in God (1 Pet. 1: 21)."
- 18 G.R. Beasley-Murray, "How Christian is the Book of Revelation?"
- 19 George Eldon Ladd, "Apocalyptic and New Testament Theology."

以上の論文の中、主要なものについて寸評を加えておこう。最初のゲルハルドソンの論文は、新約においてイエス・キリストによって完全な、唯一独特な贖罪が、歴史の中の定められた時に「ただ一度」なし遂げられたことがパウロ書簡をはじめ(コリント人への書)大部分の箇所において示されているが、必ずしも全いにおいてはなく、マタイ福音書においてはイエスの使命はこのような贖罪観の観点のみでは解釈できないと言う。一・二のイエスの名前の説明の中には、人々を罪から救うという言及はあっても、それが彼の犠牲的死を通してであるとは言われていない。二六・二七の主の晩さんにおけることばは「罪を赦すために」ということばを伝承に加えることによつて、聖さんに与る者に対する実際の効用を強調している。二〇・二八の人の子のことばは贖罪について論じている文脈で語

られているのではなく、むしろ天国において偉大な者となりた
い者たちに対し、最高の理想像を示している。以上のような点
から、ゲルハルドソンはマタイにおいては、イエスを唯一独特
な人物というよりは、模範的人物として提示されており、歴史
的な「ただ一度」は、無時間的、永遠の価値を持つ天上の理想
を支持するために行なわれたと言っている。そして、マタイは
ユダヤ教の学者から教育を受けたので、「霊的犠牲をささげる」
という彼らの表現法を用いているのであり、この歴史的背景に
照らして考えるなら、イエスの使命をマタイがこのように解釈
したことは容易に理解できると言う。この論文の問題点は、上
記三つの聖書箇所（の）の解釈のしかたに問題があるように思われ
る。ゲルハルドソンはマタイのキリスト論の倫理的面を強調す
るが、これも問題である。イエスは「神の子」であり、あらゆる
事において「神の僕」であらうとした。したがって、イエス
の「奉仕」は神への奉仕 (latreia) であったが、同時にそれは
人間に対する理想的な奉仕 (diakonia) でもあり、このような
観点から見ると、イエスの犠牲的死はラトレイアであった
が、それがディアコニアになったのだと言う（二九、三〇頁）。
この場合、ゲルハルドソンはイエスの死を、神への服従という
面からとらえているところに問題を感じる。マタイが律法学者
から教育を受けたという点も、証拠が挙げられていない。

第三の F. F. ブルースの論文は彼が一九四二年に "The
Speeches in the Acts of the Apostles" という論文を発表して

罪を救済史的な面から、人間の存在の問題に発展させたと述べら
れている。つまり、パウロは贖罪の法的面における義認を述べ
ていると同時に、キリストの死は救われる者に罪の支配からの
解放と自由を与えるものであることを述べているというのであ
る。そして、この順序を逆にすることはできないと言っている。
リダボスはケーゼマンを取り上げ、彼がキリストの死におけ
る犠牲としてのモチーフを中心から除外し、身代りの死を認め
ようとし、ない点を批判し、さらに、ブルトマンを取り上げ
て、彼がパウロの思想においてイエスの死を贖罪の犠牲として
よりも、この世、律法、罪と死などからの解放を強調し、これ
をパウロはヘレニズムの密儀教から借用したという見解を批判
している。

第六のボルンカムの論文は、ガラテヤ人への手紙第一章に示
されたパウロの自伝的記述（一・一三以下）、特にダマスコ途
上におけるパウロの経験は、彼に特殊な啓示を与えたものでは
ないことを論じている。特にパウロの義認と和解の教理はエル
サレム教会の使徒たちの伝承と異質的なものではなく、むしろ
救いの使信がユダヤ人と異邦人を一致させる真の基礎であった
と述べている。

後半の「希望」の部分では、第十二のマドックスの論文が興
味深いものであった。この論文はヨハネ福音書における人の子
の機能を扱ったものであるが、普通人の子の問題は共観福音書
に限定されており、ヨハネ福音書を扱ったものはほとんどな

から今日までの三十年間における、この問題の研究の跡をたど
りながら、彼の最初の立場は、本質的には現在も変わっていない
と述べている。三十年前ブルースは古典ギリシア語の学者とし
て、ツキジデスの歴史的記述における演説が、果たしてツキジ
デスの創作なのか、それともツキジデスが用語や文体を選んで
も、なおそこには、本来の歴史上の人物の語った感情が流れて
いるのか、という問題を取り上げ、後者の立場に立ち、使徒行
伝においても、ツキジデスの場合と同様に考えられると主張し
た。そして、デイベリウス、ヴィルケンズ、ヘンヒェン、コン
ツェルマンなどの見解と対比させながら、使徒行伝にある使徒
たちの説教が歴史的に価値のあるものであり、使徒的起源にさ
かのぼり得るものであることを力説している。福音主義の立場
における使徒行伝研究のためには適切な論文である。論文の末
尾に、この問題に対して、レオン・モリスが "The Cross in
the New Testament" において言及していることを特記してい
るあたり、暖かい友情を感じさせる配慮のある書きぶりである。

第五のリダボスの論文は、コリント第一の手紙一五・三のこ
とば（「キリストが聖書に記してわたしたちの罪のために死ん
だこと」）は最も初期の信仰告白の定式であるとして、これが
パウロの贖罪論においてどのように拡大され、発展させられた
かを論じている。彼の結論においては、パウロにはこの伝承の
本質を一貫して守っており、キリストの死が贖罪の歴史的なも
のであることは少しも変化させていないが、さらに拡大して贖

い。その点から言っても、この論文は特異なものである。彼は
ヨハネ福音書における人の子の言及されている箇所を一つ一つ
釈義して、その結果ヨハネ福音書における人の子の基本的概念
は、共観福音書と異なっていないと述べている。ヨハネ五・二
七以下において、人の子は世の終りにおける審判者として示さ
れているが、ヨハネ全体においては、終末的審判はイエスの地
上における働きにおいて開始されており、審判の未来的要素は
ほとんど除外されるに近い状態にあると言っている。

第十八のビーズリー・マーレーの論文もなかなか面白い。黙
示録はマルキオン（の）昔からキリスト教的であることを否定さ
れ、あまりにもユダヤ教的であるゆえに拒否されてきた。ルタ
ーやカルヴァンもこれを疑問視してきた。現代ではドッドやブ
ルトマンがユダヤ教的文書として見ている。この点を出発点と
して、ビーズリー・マーレーはキリスト論、終末論、神論を中
心にして、黙示録のキリスト教的であることを論証している。

最後のラッドの論文は、ケーゼマンが初期のユダヤ的・キリ
スト教的黙示文学があらゆるキリスト教神学の母となったと言
ったことから黙示文学に対する興味が復活したことを指摘し、
モリスの著作に言及して、モリスは黙示文学がキリスト教に貢
献した点は認めるが、キリスト教神学を生み出したと言うのは
言い過ぎであると言っていると彼の見解を紹介し、これをラッ
ド自身も支持して論じている。

総じて、この献呈論文集においては、贖罪論および終末論に

関する現代の学者たちの諸見解に対し、福音主義神学に立つ学者たちがいかにそれを評価し批判するかという点が顕著である。この点においては、日本における福音主義の神学者たちの置かれている状況と課題に対して、この論文集が多くの良い示唆を与えてくれることは疑う余地がなく。

(共立女子聖書学院院长、聖書神学舎講師)

Herman Ridderbos

PAUL—An Outline of His Theology

William B. Eerdmans Pub. Co. 1975, pp. 587.

村瀬 俊 夫

著者ヘルマン・リダボスは、オランダ改革派教会 (De Geëformeerde Kerken in Nederland) の卓越した新約聖書学者であるが、残念ながら、日本ではあまり知られていない。これまで邦訳された著作としては、『現代神学入門』(聖書図書刊行会、一九六六年)に、グラントの「福音主義と新正統主義」と共に収められている「ブルトマンの神学」(山中良知訳)があるだけである。他に、M・テニー/C・ヘンリー共編『聖書論論集』(聖書図書刊行会、一九七四年)の中に、「新約聖書の正典」を寄稿したものが邦訳されている。

これまで彼の著作で英訳ないし英文で刊行されたものには、

The New International Commentaries on the New Testament
の中の *Commentary on Galatians* のほか、最初の主著ともいえる *The Coming of the Kingdom* があり、小さいものでは *When the Time Had Fully Come, Paul and Jesus, The Authority of the New Testament Scriptures* などがある。

著者は現在高齢のため隠退しておられるが、長年にわたりオランダのカンペンにある改革派教会の神学校で新約学を講じておられた。小著ではあるが *When the Time Had Fully Come* は、著者の研究の関心がどこにあるかを示している点で注目される。それには「新約聖書神学の諸研究」という副題が付されている。この書は五章から成るが、そのうち第一章「共観福音書の証言による神の国」と第二章「山上の垂訓の意義」とは、最初の主著 *The Coming of the Kingdom* で扱われた内容をまとめている。第五章の「救済史と新約諸書」に扱われた内容を評論したものが、同じタイトルの原書を英訳した *The Authority of the New Testament Scriptures* である。第三章「パウロ的宣教の救済的性格」と第四章「パウロの救済論における神の律法」は、パウロ神学を扱ったものであるが、第一章と第二章で扱ったイエスの宣教との密接な関連のもとに論じられている。その幾分詳細な論述が *Paul and Jesus* に見られる。

しかし著者には、パウロ神学について、もっと綿密な研究をライフワークとして刊行する計画があった。それがつい一九

六六年、大著 *Paulus, ontwerper van zijn theologie* となって世に出た。このオランダ版原書は一九七三年に第三版を出している。しかしながら、オランダ語であるため利用が極度に限られていたことは否めない(評者もオランダ語版を入手したが、宝の持ちぐされ同然に本棚に飾られていただけであった)。大著のため英訳は望めないと聞いていたが、計らずも昨(一九七五年)年、米国 Eerdmans 社から英訳版 *Paul, An Outline of His Theology* が刊行されたのである。予約して日本ではだれよりも早く(と思っているが)入手したときの喜びは、たとえようもなかった。

第一に、訳された英文の読みやすいに感心し、感謝を禁じえなかった(同じ著者の他の英訳版には、英文の読みにくいものがあったからである)。英訳版の表紙カバーに、マーチン・ロイドジョンズ博士が推薦の辞を寄せておられるが、その最後に“The translation is most readable.”と書かれているのは、全くそのとおりである。訳者の John Richard de Witt 氏は著者の親戚筋にあたり、著者の家に住みこんで勉強された方である。この英訳の見事な出来栄については、著者も序文で特に感謝を表明しておられるほどである。

本書の内容は、十二の章に分けられ、全体で八十の項目からなる。十二の章の見出しは左のとおりである。

一、パウロ解釈の主要な流れ
二、基本的構造

- 三、罪における生
- 四、神の義の啓示
- 五、和解
- 六、新しい生
- 七、新しい服従
- 八、神の民としての教会
- 九、キリストのからだとしての教会
- 十、バプテスマと聖餐
- 十一、教会を建て上げる
- 十二、主の未来

第一章は、パウロ解釈史を概観したユニークな研究である。

宗教改革の神学は、信仰義認の教理をパウロ神学の中心とみなした。特にルターの場合は、パウロの信仰義認の教理が正典性の基準とされた。カルヴァンも、そこまでは主張しなかったものの、パウロの信仰義認の教理を福音を理解する重要な鍵とみなす点では変わりなかった。しかし、その後の敬虔主義的、神秘主義的傾向が、パウロ解釈に大きな修正を加えた。その結果、ブニニューマ(御霊)によるキリストとの神秘的結合がパウロ神学の中心とみなされるようになった。十九世紀のテュービンゲン学派の祖 F・C・パウエルがそれをはっきり主張し、二十世紀初頭の宗教史学派がそれを強力に支持した。

それに対して著者は、パウロの宣教を救済史的に把握するこ

により、義認論と聖霊論との間に深い内的関連があることを見抜く。こうして彼は、第二章でパウロ神学の基本的構造を明らかにする。パウロにとつて、信仰義認の教理は救済史における転機の到来（時が満ちたこと）を知らされた結果、福音において啓示されたものである。イエス・キリストの来臨と啓示によって、救済史における古いアイオーンは終わり、新しいアイオーンが始まった。キリストは最後のアダムであると共に、新しい人類の初穂である。こうしてパウロの宣教におけるキリスト論的Ⅱ終末論的構造が浮き彫りにされる。

第三章では、古いアイオーンの実態、罪の普遍性と本質が論じられ、さらに罪の結果を扱う中で、ローマ七章に見られるパウロの人間観に論及する。それはキリスト者の生における罪との戦いか、キリストおよび御霊の力の外にある自我の無力さを示すものか。著者によれば、ローマ七章と八章は救済史的対照をなしているのだ、そこに描かれているのは後者である。それは信仰の目に映じる、律法の下にある人間の姿である。すべての人における罪の腐敗は律法の下にある人にも見られ、ついに彼をも「私は、ほんとうにみじめな人間です。だが、私を救い出してくれるでしょうか」と叫ばせるに至る。それに続いて、罪と律法との関係が詳細に論じられる。パウロはユダヤ教との対立の中で、救いの手段としての律法を拒否しつつ、罪の真相は神の律法によってのみ明らかにされる事実を強調している。そのことによって、律法はすべての人をキリストの救いに

向かわせる。

第四章の神の「義の啓示」では、そのキリスト論的Ⅱ終末論的性格が明らかにされる。キリストの来臨によって、約束された終末論的な救いが実現した。「今」や、律法の行ないとは無関係に、終末論的な祝福である神の義がすべて信じる者に与えられる。キリストの死と復活の出来事において、すべて信じる者にとつて、終末論的な義認の祝福が現実化する。第五章では、義認と並行して、キリストの死と復活において実現した神との新しい関係に光があてられる。和解はキリストにおいてなされた神の行為で、新しい創造の基礎をなす。その終末論的性格はⅡコリント五・一七、一八の聖句から明白である。さらに贖罪としてのキリストの死を論じ、神との新しい関係において「子としての身分」が与えられたことを述べる。

第六章では、キリストと共に死んで復活させられた者の「新しい生」が扱われる。ここで中心的な役割をになうのは、義認と共に信じる者に終末論的祝福として与えられた聖霊である。新しい生とは聖霊による生にほかならない。だから「御霊によって歩みなさい」と命じられる。この新しい生を支えるものは「信仰」であるとして、改めて信仰の本質が論じられる。信仰によって、「すでに」新しい生にあずかっていると、同時に、「まだ」新しい生は完成をめざす途上にある。この信仰の二面性から、直接法（Indicative）と命令法（Imperative）の緊張関係が生まれ、第七章で扱われる「新しい服従」が生きた課題とな

る。キリストの死と復活にあずかった者は、キリストにおいて罪に対して死に、神に対して生きている者であるから、その手足を義の器として神にささげなければならない（ローマ六・一―一三参照）。それは完成をめざす聖化の歩みである。それに關して、「律法の第三の効用」（*tertius usus legis*）、自由と良心、愛、この世における生、結婚、社会的諸関係、俗権への服従が論じられる。

第八章から第十一章まで多くの紙面をさいて、パウロの宣教の中心的内容に属する教会論が扱われる。教会の重要性は、第一に、それがアブラハムの選びに始まる神の民の歴史の継続であり、その成就であることによる。この神の民としての教会が第八章で論じられる。教会の重要性の第二は、それがキリストのからだであることによる。この点が第九章で論じられる。この二つの教会観は、前者が救済史的Ⅱ終末論的、後者がキリスト論的特色を表わしつつ、相互に関連し合い、統一をなしている。第十章ではバプテスマと聖餐の問題が、第十一章では教会を建てる問題が、それぞれ詳細に論じられる。後者では、御霊の賜物、職制、礼拝について述べられる。

最後に第十二章で、未来に關することが総括される。終末論的な祝福としての救いは、「すでに」与えられているが、「まだ」完成を見ていない。キリストにおいて夜明けを迎えた救いの日は、その輝かしい完成を待望している。主の再臨への希望は、パウロの宣教の最も強力な動因の一つであった。著者はⅠ

とⅡテサロニケ、Ⅰコリント一五章などに基づいて、再臨の前に死んだ者のこと、不法の人の現われ、キリストの再臨、死者の復活、審判、完成について述べている。

パウロ神学の全体をあますところなく、包括的に論じた本書の価値は、その洞察に満ちた内容のゆえに、立場や見解の相違を越えて、まさに不滅のものと言ってよい。いつか邦訳されることがあればと、願わずにはおられない。

（蓮沼キリスト教会牧師、聖契神学校講師）

アウグスティヌス著 中沢宣夫訳

『三位一体論』

一九七五年 東京大学出版会

岡田 稔

この名著中の名著が遂に日本の教会にも与えられた。しかもラテン原典よりの完訳として。これは教会を挙げて感謝すべき大いなる慶事である。訳者に心から御苦勞さまとお礼を申し述べたい。

まず巻末の解題で本書の歴史的事情とその性格の概略を紹介し、各巻の概説まで付記して、読者の理解のため配慮してある点、大いに参考になる。

私はシャフ編のニケヤ及びニケヤ後教父選集のものしか読んでいないので、どちらが正しいのか確言はできないが、それによると、ラテン原本では *De Trinitate contra Arianos libri quindecim* とあるらしい。中沢氏の解題には「要するに本書は内輪の人々に向けて語られた秘義の論考という性格を持っている。そこにまた彼の多くの著作中においても本書はユニークな位置を占めている。本書は論争的というよりも、全体として、思索的・瞑想的・建徳的な傾向によって貫かれている静かな書物である」と書いてある。訳者も「勿論そこにアリウスの徒などに対する護教的・論争的な姿勢をいくらかは認め得るが」と付言はしておられる。私としては本書を読む者は是非シャフ編のセツドの序説を併読せられるようおすすめしたい。

とにかくアウグスチヌスは全教会の最大の教父であり、プロテスタントにとっても彼ほど偉大な教師はない。そのアウグスチヌスの教理学上の一番重要な原理についての著書であるから、日本の教会もすべての神学研究・殊に教理学研究はこの著の勉強から出発しなくてはならないと私は信じている。

訳註を入れて五二〇頁。全体はおろかその要点さえも紹介したり、論評するのは不可能である。

よって、以下私として最も重要と考える点だけを取り上げよう。

ここで取り扱われている聖三位一体という課題は、何よりもまず信仰の対象である。従って単なる理性をもって追及しては

ならない。セツド風に言うと、それは自然宗教の与り知らぬ唯啓示によってのみ人間に知りうる秘義である。聖三位一体は唯一の眞の神であり、父と子と聖霊は同一の実体・本質であると言ひ、信じ、知るには神の祐けが絶対必要である。それには何よりもまず聖書の權威を前提しなければならぬ。これについて彼以前に書かれ、カトリック教会の著者に彼は同調して「これがカトリックの信仰であるから私の信仰でもある」(一〇頁)と言ひ、實際彼がよく読んでいたのはヒラリウスだけであつたとセツドは断じている。むしろ我々が驚くことは、彼が聖書をヘブル語やギリシア語原典よりも主に古ラテン訳によって研究しながら、ニケヤ教父たちと本質的に同じ三位一体の眞理を把握し、しかも彼らの誰れよりもあの根深い従属説の誤りを一掃しえたという一事である。この謎を解くカギはどこにあるか。私はそれこそ我々福音主義神学者の一番大きな課題として共に研究したい、しなくてはならぬポイントだと思う。与えられているサゼッションをするならば、まず第一に聖書の統一という信念である。ウェストミンスター信仰告白が述べるように「神は眞理であり、眞理に矛盾はないから聖書の眞理は唯一」でなくてはならぬ。一見聖書には雑多な主張があり、矛盾したことを語るように見えるところがあるが、根本においてそれは決して矛盾ではありえない。この「聖書の意味の唯一性・統一性」への確信、それは自然理性が先験的に法則とか原理と言ひ呼び名で自明としているところの神の唯一性だけでは具体的事実と合

致しない。現実には常により複雑である。汎神論的統一も余りに簡便な答案にすぎない。聖書も文字上を読み下せば、自然現象同様多と一の雑然的併記と思わざるをえぬ。この問題が教会の神観に集約されて三位一体教理の成立を必然ならしめた。しかし彼以前の三一論にはどうしても従属説の残滓が拭い切れていなかった。ということは、かのアリウス派の異端とのけじ目が尚確立しなかったと言うことであり、その最後の一线がコンスタンチノポリス信条の中の「フィオクエ」句の可否論となつたわけである。

アウグスチヌスの三位一体論は概して、東方教会教父のそれに比して、三人格の統一性の方に区別性よりも強調点が置かれていたと言う見解だけでは話ばかりしきりしない。三人格の人格的対等性と同時にその本質の唯一平等性がどちらにも片寄らずに主張され弁証されている、というのが正しいだろう。

ここに彼の教理学全般に大きな意義をもつ「関係概念」ということの導入の真意がある。セツドはその点を明快に指摘している。「父と子と聖霊の間にある順位は父が第一位、子が第二位、聖霊が第三位である」と聖書は色々なことばでそれを述べる。一方にこの順位を単純に認めれば結局はアリウス説になるし、単純に否定すればユニテリアンにならざるをえない。そこに旧約(申命記六・四)の唯一神教と新約の三位一体の教えとを両立させることが聖書の統一の基本とし要請される以上、問題解決の唯一の道は、本質と人格という区別を立てることに見出

されたわけではあるが、アウグスチヌスはそこに、関係概念を導入した。そうでないと尚充分な解説はできないことを教理学的に立論したのが本書の最大の要旨である。従属には三つの区別がある。(一)三位一体的(又は父と子との間柄上の)従属と、(二)受肉論的(神にして人なるキリストの状態上の)従属と、(三)アリウス説的(子は父と同様の完全神性を持たぬ被造物にすぎぬ意味での)従属とがある。彼の説(ニケヤ教父)は第一の意味での従属を明言しているが、第二の意味については含蓄以上には語っていない。勿論第三の意味では明確に否定排斥している。そこで或る教理史家らは「ニケヤ信条は父子間の従属は認めるが、本質上の従属は否定している」と述べている。アウグスチヌスも本書で父は子のプリンシピウム(源)だと言う(一五七頁)。しかし彼はこの語を人格関係だけに用いていて本質上には決して使わない。だから子のゼネレーション(生れ)も聖霊のスピレーション(出ること)も、それはアリウス流の本質的従属ではなく、あくまでも三位一体論的、即ち人格と関係上の従属問題である。本書のこのところを読むとき、セツドの注意する通り、御子の永遠よりの出生の問題と罪人の贖救者としての天よりこの世への派遣(つまりフィリアルとインカーネーション)の区別の重要性に留意しなくてはならぬ。

私はウォーフィールドの神学の特質を考えると、彼の本領は、哲学的思弁的神学にも、歴史批判的聖書学にもなくて、実

に聖書の教理体系的組織神学、つまり教理学にあつたと言う、フランシス・バットの見解（『プリンスストン神学評論』一九二一年号にあるウォーフィールド博士追悼演説）を思い出す。そしてこの点アウグスチヌスの主著との共通性に深く興味を覚える。

唯本書十五卷中七卷までと九卷以下とに一つの評価上の差別があることについて一言して置こう。セッドも前半は後半より価値高く重要だと言う。けれども後半を無下に過少評価することをセッドは戒めている。アウグスチヌスは創世記一・二六に基づいて「人間にある神の姿」の中に三位性の似像を読みとる。カルヴィンもその卓見に習って、「人間の精神だけでなく肉体にも神の似像が反映している」ことを認め、そこから文化理論を引き出す緒口を置いたが、しかしアウグスチヌスのように三位性そのものまでも読みとることは消極的であつた。パンチルの高調するオントロジカル・トリニチが、神の本質存在であり、また神の自然と歴史における活動の基本原理であり、一切のこの現象的謎を解く究極の真理であると言う確信を我我福音主義者は心から信じると思う。けれどもその実際の思索と研究における活用ということになると、軽々しく振り回すには余りにも人知を超えた深い秘義である。その辺の信仰と理性、むしろ信仰を与えられた者の理性的活動奉仕の限界を常に敬虔に謙遜に自覚しつつ、許された（信仰の量に応じた）神学活動をしなければならぬ。いたずらに、触れるな味わうなの

怯懦に陥つては無責任の罪を犯すであらうし、原理を振り回しては人をも我をも傷つけるであらう。
この意味でまず大教師アウグスチヌスに学ぶことは誰にとっても絶体有益であると私は断言してはばからぬ。特に本書を隅々までよく噛みしめて詳読したいと思う。

日本の大学では今尚アウグスチヌスは神学としてよりも哲学科の教科書として尊重されている節が多い。矢内原忠雄の土曜学校講義はその点敬虔な信仰の糧として学ばれたものであつてよい参考になる。しかしなんと言つても福音主義神学陣営として我々はもつと本格的にキリスト教正統神学の伝統に立ち帰つて、教理学の最良のテキストとしてこの書を味読したいものである。語学的に諸外国語の参考書や註解書があるとは思ふが、私としてはシャフのものは貴重な手引書として併読されることをお推めして擲筆する。

（日本基督教改革派教会所属、引退神学教師）

野呂芳男著

『ウェスレーの生涯と神学』

一九七五年 日本基督教団出版局

小林 和夫

カルヴァンやルターを中心とする宗教改革者に関する研究は数多くあるが、ウェスレーに関してはごく僅かなものしかない我が国の神学界において、著者が、本格的なウェスレーの研究書として本書を出版されたことは本当に意義の深いことである。欧米にはウェスレーに関する研究や文献の数はかなり多くあるが野呂教授の思索的構想力や表現はそれらのものと比較しても抜きん出たものを持っている。本書は初めから一書として企画され著述されたものではなく、むしろ著者の三十年近くのウェスレー研究の集積と言つてもよい。したがって、いわゆる統一性には欠けるが、それだけ読者に各部各章の關係の行間を判断させる構成になっている。

内容は形式的には四つの部分に分けられている。すなわち、

序説 ウェスレーの教会史的背景

第一部 ウェスレーの生涯

第二部 ウェスレーの神学

結論

第一部と第二部が本論に相当するわけであるが、序説は、イギリス宗教改革より十八世紀のイギリスの風潮を描いて、ウェスレーの時代を歴史的に掘り下げ、結論においてはキリスト者ウェスレーの政治、経済の世界に対する視角とウェスレーの神学の展開方向が論じられている。

本書では、著者の神学的立場が非常にはっきりと打ち出されているので、まずそこを明確に理解しておくことが大切であらう。

周知のように著者はすでに『ウェスレー』（日基督教団出版部一九六三年）『実存論的神学』（創文社、昭和三九年）『実存論的神学と倫理』（創文社、昭和四十五年）を出版しており、これらの書にその神学的立場は、はっきりと表現されている。

ただ、これらの書になじみのない読者の為に論者は彼の立場を最も的確に、しかも本書のウェスレー理解との密接な關係にあると思われるものを紹介しておこう。著者は昭和三十四年発行の『基督論の諸問題』（創文社）における「実存論的なキリスト論への一試み」の文章に後記として次のような文章を発表している。「私はこの論文を契機として、今までの私の立場から抜け出たと言つてよいのではないかと思う。反省してみる時に、私の今までの立場には二つの傾向が存在していたと考えられる。その一つは……ブルトマンに見られるようなきわめて実存論的な傾向である。もう一つの傾向はフリードリッヒ・フオ

ン・ヒューゲルによって強く影響され、それ以後私の中に生きていた神秘的存在論である。この後者がポール・ティリックの中にある神秘的存在論と共通なものを私に与えて、そして、きわめて古典的な神学に私を近づけていたのである。私は今まで以上の二つの傾向を調和させようとの努力をして来たのであるが、もはやその可能性がないと結論せざるを得なくなった。即ち神秘的存在論は聖書的な我々に決断を迫る人格的な神とどうしても調和し得ないと思うようになったのである。それ故に、私は自分の中にある実存論的な神学の傾向を更に押し進め、私の中にあった神秘的なものを、その実存論的方向によって解釈しなおさなければならなかったのである。このことが此の論文を契機として、これからの私の歩みを決定してゆくであろう……」これは著者の神学的立場を明らかにするきわめて決定的な発言であると思われることができる。

このような自覚的な立場から従来の欧米における方法論とは違った独自の方法論によって研究が進められてゆく。著者は従来の方法論を大きく三つに分ける。すなわち、第一はピエトやトッドに代表される立場で、ウエスレーをイギリスの高教会主義の流れをくむものとみるもの、第二はウエスレーをヒルデブラントのようにルターの、セルのようにカルヴァンの流れに近づけて理解するもの、第三はリンドシュトゥレームやスターキーのようにプロテスタンティズムにおける聖化の運動としてみる立場である。これに対して著者はいずれもこれらが中心的真理

をもっているのを認めた上で、第一の立場ではウエスレーの福音的回心のもつ重要性が解明されず、第二のそれではウエスレーにある高教会主義の影響を十分説明できないとする。第三の立場には大変共鳴して、第一と第二が結局ここには含まれるとするが、それでも著者はこれらいずれの一つにも立てこもらないで、高教会主義と宗教改革的福音主義を二つの焦点とする「聖霊体験の神学」と言う楕円がウエスレーの神学であるとしている。

これはウエスレーに見られるダイナミックな両極性をよく調和した優れた見解である。

さて、第一部の「ウエスレーの生涯」において、ウエスレーの生涯を形成した多くの要素が紹介されるが、それらは有名なアルダースゲートの危機的回心とその後の伝道生涯におけるその展開を照明する。このアルダースゲートの経験は今日でも多くの学者により、これが第一の回心のことが、第二の回心のことは、諸説がある。渡辺善太氏はウエスレーが自らの危機的聖化の経験を日記にも書簡にも直接明記してないことを指摘して、これがウエスレー研究における一つの大きな問題点であるとしている。しかし一般には彼の説教や書簡の中にこの点が強調されているので、その個人的経験の日時は明確でないとしても、経験の事実は認容されている。こうした中で、一部の米国のウエスレーンの中には、このアルダースゲートを第一の回心と見るものがある（G・A・ターナー『ウエスレー神学の中

心思想』284―285頁参照）。しかし評者は著者と共に第二の回心とする。そしてこの回心の重要性について「この回心は真実に福音的な回心であったということである。それまでのウエスレーは、高教会的な教理の上に立って、神の恵みに支えられたところの人間の良い行為によって救われると確信していた。ところが、今は明確に、たとえそれが神の恵みによって支えられているものであっても、人間の良い行為によっては救われまいということ、徹底的に神の恵みのみによって人は義とされるということを理解したのであった。だからピエトやトッドのように、第二の回心に少しも特別な意味を認めないで、第一の回心のもっと徹底したものにはすぎないというのは誤っていると思う」（135頁）と記している。

第二部「ウエスレーの神学」に入ると著者の本領が発揮される。その叙述は、教理史的背景の重厚さと、現代神学に対する鋭敏な感覚に満ちており、見方によっては、ウエスレーを中心とした、教理史的解説とともなうことができる。

各論の諸教理の解説は、伝統的にかなり多くのウエスレーン神学者たちによって解明されている点も多いが、著者の第五章の神学的認識論はユニークである、ウエスレーの神学の特徴を体験主義として同時に著者の主張の実存論的傾向が交差、浸透する部分である。この部分は評者も益せられた。コリン・ウィリアムズの『今日のウエスレーの神学』（Wesley's Theology Today）の消化が、その下敷きになっているように見える。）

ここで著者はウエスレーの体験をたんなる内面的個人的主観主義と見ず、イエス・キリストとの出会いと言う実存的出来事を土台とした教会の伝統の中での体験であると積極的に評価する。続いて、神、キリスト、義認と聖化、聖霊、教会の諸論が扱われるが、いずれも体験を中心とした実存論的視野より解釈される。

この体験の実存論的把握は、それが宗教的体験であればどの途、実存論的になることは一般的に考え得る事であるが、この線をどこ迄も進めていってウエスレーを理解しようとするれば、どうしてもウエスレーにおける神学的超越面は、彼の人間観の中に吸収されてしまう恐れがある。そして実存主義のもつ主体的内面化はウエスレーを孤立させてしまうであろう。ウエスレー自身が常にその活動の社会的広がりを考えていた事を考慮すれば、実存論的理解ではその広がり期待することはできない。

そこで著者は超越に対するこの苦悩を、サン・テグジュペリの心で体験する空間の「広がり」を援用して、他者にも開かれた実存主義なるものを考えたり（522―523頁）、他者との交わりの強調のために高教会それ自身のもつ教会の交わりとしての伝統などをもって来る（242頁）わけである。

こうした面を見ると著者の自説にウエスレーが引き寄せられ過ぎてはいまいかと考えさせられる点もある。ウエスレーの体験的理解において、神秘主義より実存論的思考へと進む著者の

考え方はこのようにして新しい理解であると言うことはできるが、波多野精一氏に見られるような神秘主義より人格主義へと進む、古い伝統的理解もこの時期に改めて考え直されてもよいであろう。その点で本書は、非常に挑戦的であり、これからのウエスレー研究は、本書との対決を経ずしては考えられないであろう。

とくに日本のウエスレーアンを自称するものの中には古びてしまつて、今日の時代には発言力を失つてしまつていくウエスレーを後生大事にしているような面が目立つ。そのままにしていると、ウエスレーのメッセージを時代の遺物にしてしまつような警告をこの書はその方面にも与えていると言えよう。

(東京聖書学院教授)

「現代とキリスト教」小論叢書(第一号より第七号)

日本基督教改革派教会西部中会文書委員会発行

鍋谷 堯 爾

「現代とキリスト教」小論叢書は、四年前の昭和四十七年一月に第一号が発行されてから、四八年に第二号と第三号、四九一年に第四号、五〇年に第五号、第六号、第七号と順調に発行されている。どれも、A六判、四〇ページ前後の小冊子である。

第七号「改革派教会の歴史」

橋本 竜三

改革派教会にシロウトの読者は、まず、歴史的展望をえるため、第七号の「改革派教会の歴史」ついで第六号の「日本基督教改革派教会の伝統と信仰」、そして第一号へと読みすすめる。よい。改革派教会は、日本では、わずか六三〇〇の会員の小教会であるが、全世界の改革派長老派の信徒は、「五〇〇〇万とも八〇〇〇万とも、一億とも言われる」(第七号三四ページ)大教会である。その出発は、カルヴァンであつて、「改革派教会、または長老教会が、しばしばカルヴァン派教会と呼ばれることから理解されるように、この教会はその信仰的、神学的源泉は主としてジャン・カルヴァン(一五〇九〜一六四四年)に求めることができる」(第七号三三ページ)。しかし、ルーテル教会が、ルターという個人名を冠して呼ばれてきたのに対して、改革派教会は、「常に改革され続ける」改革派教会としての使命の強烈な自覚が、個人の名を冠することを回避してきた(前掲書、三三ページ)。改革派教会の特徴は、信条教会であることであるが、ヨーロッパ大陸系の改革派教会が、ベルギー信条、ドルト基準、ハイデルベルグ信仰問答書を信条にしているのに対し、同系統に立つ、長老教会の方は、イギリス系のスコットランド信条、ウエストミンスター信条を採用するものが多い。ところが、日本基督教改革派教会は、名称は、大陸系の改革派教会の名称をもちながら、信条としてはイギリス系のウエストミンスター信仰基準を採用している。

刊行の趣旨は、第一号の序文に、文書委員会委員長春名氏がつぎのように述べている。「急激な社会変動の中で、神の永遠の真理を告白する証言の活動は焦眉の急である」(八ページ)。改革派信仰とは、聖書の純正な福音に基づく「信仰の遺産」が、どのような激変する時代においても不変であるという確信に立ちつづも、一方では、それを継承する信仰者たちが、具体的な歴史的状況の中で、神の証人として立てられているという自覚的な営みでもある。「信仰の遺産」は現在それを所持するものにならないければ「骨董化」する。真理内容を改変してはならないが、「み言によって改革されつづける」努力はつづけないければならない。ここに、改革派教会西部中会が、「現代とキリスト教」叢書を発刊しようと決意した意義があるとせられる。

第七号迄の内容は、

第一号「日本人とキリスト教」……………岡田 稔
第二号「聖書論」……………

啓示と聖書……………

橋本 竜三

聖書の靈感……………

森居 康次

聖書の読み方……………

安田吉三郎

第三号「恵みの契約」……………

松田 一男

第四号「聖書における労働の意義」……………

山中 良知

第五号「改革派弁証学序説」……………

春名 純人

第六号「日本基督教改革派教会の伝統と信仰」……………

吉岡 繁

このことについては、第六号「日本基督教改革派教会の伝統と信仰」によつて、その理由を知ることができる。一八五九年に日本にはじめて渡来したプロテスタント宣教師のうち、フルベッキ、S・R・ブラウン、シモンズはオランダ改革派、ヘボン は長老派であり、また一八七二年に日本ではじめて設立されたプロテスタント教会である横浜教会が、オランダ改革派の宣教師バラによつて指導されたことを考えると、日本プロテスタント教会の伝統のきっかけは、オランダ改革派系が大きかったといつても過言ではない。ところが、じつさいに、その後、日本伝道の主流を占めたのは、アメリカの長老教会の宣教であり、しかも、一八三七年に分裂したニュー・スクールとオールド・スクールの流れが両方とも日本の教会形成に影響することになった。ニュー・スクールは、穏健なカルビニズムの上に立ちながら、個人的教育と倫理主義的傾向を強調するもので、ユニオン神学校がその頂点にあつた。一方、オールド・スクールは、教理と教会政治の長老派の原則を強調するもので、プリンスストン神学校が、根拠地であつた。さらに、プリンスストン神学校が、リベラリズムに傾くと、プリンスストンの教授であつたメーチェンは、オールド・スクールの伝統を守るため、一九二九年にウエストミンスター神学校をフィラデルフィアに設立した。現在の改革派教会の伝統は、メーチェンおよびウエストミンスター神学校によつて歴史的カルヴィニズムに導かれた角田、常葉、田中、岡田、松尾らによつて、土台を築かれたとい

つてもよい。そして、ニュー・スクール・プレスビテリアンの流れは日基の中に残っていると考えられる(第六号六一〇ページ)。そこで、自由主義神学はもちろん、敬虔主義的なニュー・スクールの伝統に立つ穏健なカルビニズムや、バルト主義と対決する歴史的カルビニズムに立つ改革派神学とは何ぞやという疑問が寄せられる。

日本基督教改革派教会は、敗戦の翌年、昭和二十一年に設立せられたが、その創立宣言では、二つのことが明らかにせられている。ひとつは、全世界を神の主権の下におく有神論的世界観人生観の確立である。また、キリスト教においては事実(歴史)と解釈(教理)が本質的なものであり、教理的知識はキリスト教信仰の本質的部分を形成するものであると主張せられる。第二の点は、キリスト教会の一致は、教理と政治と世界の一致においてのみ可視的に表明せられるとす。そして、改革派教会の教理一致は、基本信条とともに、三十数ヶの改革派諸信条に示されているが、その中でもっとも整備されたものとしてウェストミンスター信条を採用した。

以上の流れを理解するならば、「現代とキリスト教」小論叢書が、第二号において「聖書論」ととりあげ、第三号において、「恵みの契約」ととりあげ、以下、「聖書における労働の意義」「改革派弁証学序説」さらに、「教会と国家」のテーマをとりあげていくという枠組が理解されるのであって、さらに今

後においては、教会政治や、信仰生活の諸問題がとりあげられてゆくであろうことも期待せられるのである。

第一号の岡田稔「日本人とキリスト教」は植村正久を中心に明治以来の神学的な流れを評論しながら、戦時中の教団成立を経て、改革派教会が昭和二十一年創立にいたるまでの消息を述べている。そして、日本のプロテスタント教会が、植村正久の教会型、海老名弾正の社会型、内村鑑三の聖書研究型、中田重治の伝道型に分けられるとすれば「われわれは日本キリスト改革派教会がその基本的な点で植村型であると判定することを誰も拒絶はしないであろう」(第一号二七ページ)という。そして、日本人への伝道の根本的焦点は、唯一神神信仰と三位一体観を深化し、そこから生じる罪観と贖罪観に立ち、死霊崇拜や御利益宗教と戦わねばならないとする。

第二号においては、聖書論が、橋本、森居、安田三氏によって展開せられるが、橋本氏は、ヴァン・テイル、ベルカワーを引用しつつ、改革派聖書論が孤獨な道、独自の道であることを主張する。ヴァン・テイルによれば改革派聖書論は「ローマ・カトリック、新正統主義、キリスト神秘主義、更には、福音派からも区別される」のである。そして、それは啓示と聖書の関係の理解にかかっており、とくに今日のように超越性に対する嫌悪と挑戦のうずまく時代に、確固たる啓示の理解に立つて聖書

論を確立する必要性を訴えている。ついで森居氏は「聖書の靈感」の問題点を指摘し、救済史派、新正統派、新解釈学派を弁証しつつ、一、聖書の靈感は、救済史と有機的に関係をもっていること、二、聖書の自証するところであること、三、聖書の無謬性と権威との不可分性について論を展開している。

第三号において、松田氏の「恵みの契約」がとりあげられていることは、改革派神学が、聖書論という形式面と、福音理解を恵みの契約として理解するという内容面の相関関係に立っているだけに当然といわなければならない。松田氏は、ルター派はキリスト論的強調をしたのに対し、改革派は、キリストによる救いが、神と人間の契約関係と交わりの回復と完成を目ざすところにまで神学を高めるところにまで到達し、「今日聖書的な契約理念と恵みの契約の教理が保持され、また発展させる努力がなされているのは改革派信仰に立つ教会の中においてのみである」(第三号六ページ)とまで主張する。カルビン主義の中心である予定説の問題の解釈としては、「恵みの契約」を法的関係面と命の交わりの面の両面に分けて説明する。そして、それは見える教会と見えない教会の区別と関係しているが、「まことに見える教会は、恵みの契約の法的関係面の番人であり、管理者であって、この面でよく管理されている教会は、選ばれた者たちが育てられるよき苗床である」と言うことができる。見える教会は、ローマ・カトリックの考えるように、救いの恵みの提

供者ではなく、恵みの契約の管理者である」(第三号三七ページ)。

紙数の関係で、第四号、第五号にふれることができないけれども、改革派教会の立つべき基盤とその展開を要領よくまとめて知ることができる小論叢書で、改革派以外の人たちでも、有益な参考書として用いることができる。ただ、福音主義に立つ教派の中で、改革派やルター派のような信条教会が、信条や教理の重要性と絶対性を主張するのみでは、伝道や献身に中心をおく他の諸教派の人々とのように対話してゆくかの問題は残される。また、「改革主義」が、「たえず改革せられる教会」という意味でなく、固定化した絶対主義を主張しているかのような誤解を受ける箇所がみられるのは残念である(第一号三〇ページ以下の図など)。その点で、第四号「聖書における労働の意義」において、山中氏が日本の教会の失敗の原因について、「改革されつつ」の意味を具体的に示されている意義は大きいと言わねばならない(二一ページ一六―一九行、三八ページ一―三行目)。

(神戸ルーテル神学校校長)

八木誠一著

『仏教とキリスト教の接点』 他教書

―仏教とキリスト教の比較研究評―

久保田 周

仏教とキリスト教を比較する研究書としては、われわれは今日まで次の教冊を見出すことができる。

(一)『仏教とキリスト教の比較研究』増谷文雄 筑摩書房 一九六八年(初版一九五六年)二八四頁

(二)『仏教とキリスト教との邂逅』H・デュモリン 西村恵信訳 春秋社 昭和五十年 一九三頁

(三)『禅とキリスト教』エノミヤ・ラサール 柴田健策訳 春秋社 昭和四十九年 二二三頁

(四)『キリスト教と仏教の対比』岩本泰波 創文社 昭和四十九年 四七一頁

(五)『仏教とキリスト教』滝沢克己 法蔵館 昭和三十九年 二八六頁

(六)『仏教とキリスト教の接点』八木誠一 法蔵館 昭和五十年 四一九頁

以上の他にも新書判でこの種のものを扱ったものがあるが、今

はすべて省略する。

(一)に関しては、増谷文雄は両宗教を「護教的立場」でこれを観るという偏見から脱して、「外に立って」観る客観的立場を強調する。これは当然の事ではあるが、問題は一つの宗教に主體的に係わる人間(増谷の場合は仏教)が、それから脱して「外に立つ」という場合に、何を根拠にしてそう言い得るのかの問題である。つまり、比較研究の客観的立場としての土俵、比較のベースを何処に置くのかが問題なのである。増谷はこれに對して両宗教の共通の立場なるものを選び出し、人間論、幸福論、信仰論、実践論において考察しようとする。すなわち両者の共通の論題においてこれを比較するというだけで、ここでは積義的な問題とか、或いは両宗教の根源的理解に対する比較研究などについては扱われず、現在ある形でのキリスト教と仏教に關して、特にプロテスタントと浄土門仏教の対比、パウロと親鸞との比較などが扱われている。

(二)はハインリヒ・デュモリンによって書かれたものである。

今日の仏教徒とキリスト教徒とが對話をなし、その對話を通して両者が、特に西欧側の人々が、アジアの一大宗教である仏教を理解するよすがとすることを目的として著わされた書であるように思われる。日本をよく理解している著者が「極東文化は宗教的である」と述べることによって、西欧側が率先して對話のグループに参加することの重要性を説いたものであって、特に一九六七年三月二十七日、四月一日の大磯集会の体験記録に

は、この種の問題に興味を持つ者にとっては、大いに学ぶべきものがあると思う。いずれにせよ、デュモリンは今日における両宗教の對話を通して、将来における世界の文化、或いは世界觀の要請に對して、人間の営みのよりよき発展と成長を期待しているのである。われわれは、学問的な比較研究に關してこの書から何程かを引き出そうとしても無理である。

(三)では、仏教特に禅仏教とカトリックキリスト教の接近という現実の日本における両者の実践的展開を踏まえて、エノミヤ・ラサールは、坐禪の修行とキリスト教信仰とが矛盾しないことを述べ、そればかりでなく坐禪が方法論的にキリスト教の祈禱を、体験的に支援するという立場をとりつつ本書を展開し、西欧の人々に禅を紹介しているのである。以上の二冊は研究書というよりもむしろプラクティカルな問題に対する啓発の書とも言うべきものである。

(四)は(一)と同様な傾向を持つものである。岩本泰波はここで比較研究という言葉を使用せず、単に対比と名付けて、仏教とキリスト教をつき合わせている。ここでは徹頭徹尾人間の問題に關してであり、しかも人間が常に宗教的であるための人間の根源の問題、すなわち罪(罪業)に悩む現実面を捉えて、仏教とキリスト教が、かかる人間に對してどのように発言するかを探るものである。従って(一)の宗教学的な立場ではなく、また後述の(五)の哲学的批判論の立場からでもなく、全く独自の立場を開拓して両宗教の対比を試みたものとして注目される。前述のよう

に宗教的人間とは根源に係わるものであり、その根源が直接的且つ絶對的である限り、根源が働きとなる方向に起動すると言う。この事は既に宗教哲学的領域に属すると言えるようであるが、著者はここで両宗教の異質性を徹底的に追求する姿勢を採る。概してこれらの異質を明らかにするための主題は教理的であると言えようか。すなわち第一章、罪と罪業、創世記三章と大乘起信論、パウロの思想と親鸞の思想が問題にされている。第二章、「神の言への反逆」と「如来の願よりの逸脱」、及び第三章、「福音を否む罪」と「誓願疑惑」では第一章の問題点をさらに深く教理的に対比しており、バルトの見解をも参照しながら、大乘仏典中特に浄土三部經が問題としている誓願について、それに対する否定の論理の構造における対比を展開する。第四章、「十字架の死」と「寂滅」及び第五章、「愛」と「慈悲」は、対比の素材そのものに若干の疑義があるようである。すなわち四章では十字架の死のみが語られて復活が語られない所に十字架理解の甘さが問われるであろうし、従ってそこに立脚した対比の視点が失われる恐れがある。以上のように考察した場合に、岩本の対比は根源を扱いながら、資料的には甚だ恣意的であることは否めない。例えば使用文献に對して、キリスト教側については専ら聖書のみが問題にされ、仏教側については道元、親鸞の著書にまで及んでいるというアンバランスを指摘することができるであろう。私見によれば両宗教の対比がこのように根源に係わる追求の場合には、歴史的限定領域を設

定して、そこにスポットを当てていく方法論が説得力を持つのではないかと思われる。

(四) に関しては、西田幾太郎、久松真一を師と仰ぎ、仏教的な背景をもつ滝沢克己が、バルトに学び、自らはキリスト者としての立場で、仏教とキリスト教を哲学的に批判する内容を持つものである。本書においてわれわれは西田、久松らの京都学派の人たちの絶対所与に対する把握の経路が、内在的自己同一とか、内在的超越なる立場を踏まえて、「無神論的宗教」を標榜していることと、彼らのキリスト教批判の行き過ぎを是正する必要性があることの確認を綿密に論じているのを知るのである。滝沢の場合その神学乃至は宗教哲学の根底には「インマヌエル」論理がある。この「神われらと共に在す」は人間にとってアプリオリな宗教実存ともいうべき人間の根底における宗教性であって、これを離れては何一つ説明され得ないといった性質のものであり、これあることによってあらゆる事物は支えられ、存在の根底における絶対所与との係わりを規定するものとして注目される。

(五) に関しては、通俗的な仏教とキリスト教の比較研究といったものではなく、むしろ著者八木誠一の統合論の展開を両宗教の各相、各部分にあてはめて批判し論述したものである。従って、この統合に関する限り、両宗教が部分的にある点で重なり合っていること(接点を持っているということ)を確認することによって、普遍妥当的な概念としての「統合」を用いて両宗

を統合体といい、この集合において上述の関係が成り立っているとき、この集合は統合されている、という。

さて八木統合論において批判されねばならない点は次の三点である。

(1) 聖言葉の權威の問題について。八木はこの点に関して、本書で解釈者(I)、事柄(S)、文獻(L)の関係を、 $I \downarrow L \downarrow S$ と $I \downarrow S \downarrow L$ の両方を認めており、両者の相互否定媒介によって、統合論の成立を計ろうとする。問題は、福音的キリスト教が常に $I \downarrow L \downarrow S$ の線を通じて来たのに対して、ここで $I \downarrow S \downarrow L$ を認めるとなれば、われわれの聖言葉に対する權威と抵触する。八木に言わせれば、まさにそれこそ統一であって統合ではないときめつけるであろう。しかし逆に一つの主義に固執はしていても、その固執性はその人間の実存であるから、要は固執性に加えてそれとは別な弾力性を同時に持ち合わせているかどうかすべてがかかっていると思われる。このように比較思想論を論ずる場合に、比較研究が宗教学のレベル、或いは宗教哲学のレベルで云々されるなら問題はないが、それを神学のレベルで扱おうとする限り、われわれは以上の道をとらざるを得ないであろう。キリスト教が信条主義に陥り、ドグマ化し固定化して統一化した時に、内部からそれを打ち破る運動(例えばルター、カルヴァン、ウェスレー等の働き)が起り、新たな統合を目指す、いわゆる統一↓自由↓統合のパターンがキリスト教の歴史の中で絶えず反復生起していることは間違いもなく事

教が批判的に正されていくことを期待する目的を秘めている。さて八木が述べる統合とは一体何であるのか。統合が成立する前提条件として、宗教的には滝沢の言う「インマヌエル」論理がここで踏襲されている。それを本来の実存と称し、個人がそれぞれの宗教に係わる場を宗教的実存と称している。従って本来の実存が宗教的実存を包みこんでいるのであり、その意味では、宗教的実存はその成立の場所で絶えず本来の実存を語り得、また本来の在り方を志向しているのである。キリスト教的な用語で八木は統合論の基本的テーゼとして「ロゴスが肉体となる」ところ、統合体が現成する」と述べる。ここでロゴスとは八木にとっては直接的にイコール、キリストを指してはいないが、それも含めて(それ以上の範囲を意識して)、本来の実存が宗教的実存化する時に統合が成立するのである。真の意味でこの働きが遮断され、人間の統一化への傾向が一旦始まると動きがとれなくなるようなものは統一と呼ばれるものである。少し長いが八木自身の言葉によって、統合の定義を引用すると、「複数の主体的・自己決定的な個があつて、この個は互いに相異なる個性を持ち、したがって必ずしも互いに相手の要求通りにはならない。互いに他に対して拒否権(抵抗権)を持ち、また互いにこの拒否権を承認してもいる。しかしこのような個が同時に互いにかかわりの中にあり、他者へのかかわりを媒介してのみ自分自身であることが出来る。しかもこれらの個が全体としてひとつのまとまりをなしている。このような個の集合

実であり、その点統合論の洞察は当を得ているといわねばならない。

(2) 本来の実存と宗教的実存の区別について。滝沢がこのように分類する時、彼はキリスト教と他宗教との比較のベースをこれに求めたことは否めない事柄である。すなわちイエスの受肉が「インマヌエル」に基づいて具現されたのであって、受肉そのものがインマヌエルではないのである。受肉はインマヌエルの具現に過ぎない。キリスト教における理解がこのようなものであるとすれば、他宗教においてもインマヌエルの具現としての在り方を並列的に認めることができるというねらいがあると考えられる。しかしここでもわれわれの立場に即して言うならば、キリストの受肉は唯一のインマヌエル具現であって、他の方法を認めるわけにはいかない。キリスト論、贖罪論への固執性は、他の宗教の真理性を拒むのである。救いの唯一絶対的方法としてのキリストの受肉が存在し、十字架の一回性があり、復活を合わせてわれわれに対する贖罪が可能となる。このような排他性においては到底神学的なレベルで比較研究を果たすことは不可能であると思われる。問題はここでも一連の固執性に対して、別に他の真理性を受容する弾力性の有無の如何が問われるのである。

(3) 伝統に関して。伝統とは何か。教義信条に対して無批判に踏襲することが伝統なのか。或いは或る種の構造主義に陥ってしまうことであろうか。福音主義神学が各教派においてそれぞ

れ良き伝統に支えられ、それを踏襲しつつ前進する過程で、伝統を無視して全く個人の放縦的態度にまかせてしまうとすれば、事態は混乱の極に達することは明白である。ではどうすればよいのか。私見によれば、信仰は先達から何らかの形で直接に受けとり、それを具現するものである。従って信仰の受容が先ず生起し、さらに信仰の吟味が必然的に生ずるのである。われわれはここでも伝統に立脚しつつ、信仰の吟味を怠ってはならないのである。統合論でいう一つのパターンがいきなり生起するのではなくて、好むと好まざるにかかわらず統合を目指してわれわれは進むのである。この点においても前述の弾力性が要求されるのである。

さて仏教とキリスト教の比較研究はこれらの教書において全く個性的に展開されているのを見た。いずれも学的にそれぞれの立場において比較の場が設定され、その小さな土俵の中でのみ有効なる比較論が展開されているといった所が実状である。われわれは福音主義神学に立つものとして、他宗教、特に仏教に関心を寄せることが、一つには日本という土壌に福音を土着化させるために不可欠な問題であるからであり、別には、単に護教的、伝道的見地からの発想ではなしに、真に對話し、對話の中から生み出される有効な論理が福音に寄与するものとしての意味において、この種の学問への関心を呼び起こすことはあながち見当外れではないということを力説したい。

評者は個人的には仏教特にインド仏教に関心を寄せており、

仏教の成立時におけるインドの事情及びインドを支えているダルマの理念が、仏教の中にどのように脈打っているかを知ることによって、キリスト教の体内に流れている「わたしは有って有るもの」と言明されるヤーヴェなる神の顕現が、イエスにおいて一層明確になつて具現されているもの（それを端的に福音と呼んでいる）を的確に把握するようにしたいとの願いをこめて、評者自身は或る弾力性をもちつつ仏教との對話を試み、その成果を期待している学徒の一人である。いずれにしてもこれらの教書の仏教とキリスト教の比較研究書から学び得ることは、主として人間論的関心に根ざしているということであり、この意味では、今後共われわれは小さな殻に閉じこもることをせず、大海に泳ぎ出して新たな息吹きを吹いこみ、この分野においても学問的追求を怠ることなく遂行しなければならぬと考えるものである。

一般に比較研究においては文献学的研究と哲学的研究とが両者あい補つてなされねばならず、その点どちらか一方にかたより勝ちであるが、今後の仏教とキリスト教の比較研究において新しい方法論が見出されて、われわれの立場における比較思想論が確立されることを念ずるものである。

（大阪基督教短大助教授・

日本自由メソヂスト堺基督教会牧師）

Jacques Ellul

LE VOULOIR ET LE FAIRE

Labor et Fides, 1964.

（邦訳、エリユール『意志と行為』

——キリスト教倫理の研究——抄訳（白水社）

森 川 甫

著者、ジャック・エリユールは西ヨーロッパ、北米において既に著名な現代プロテスタント思想家である。一九一二年一月六日、ボルドーに生まれ、ボルドーおよびパリ大学で歴史学と社会学を専攻し、法学士と文学士の称号を得、一九三六年には法学博士号（ローマ法制史）をあたえられている。一九三七年にストラスブル大学講師に就任するが、一九四〇年にヴィンシー政権により解任される。一九四四年にボルドー大学法学部教授に就任し、また、一九四七年以来、政治学研究所の講座も担当し、現在にいたっている。一九三三年からエマニュエル・ムニエの創刊した雑誌『エスプリ』の編集を担当しており、一九三六年から三十九年にかけて、政治活動に参加し、一九四〇年以後はレジスタンス運動に加わり、解放運動の地方書記として活躍した。一九四四年、フランス解放後、ボルドー市助役に招かれたが、一九四七年にいったい政治活動から退いている。一

九四七年にはフランス改革派大会委員となり、また世界教会協議会においても専門委員会のメンバーとなり、一九五〇年には改革派教会大会役員となる。

著作は法学、社会学、社会制度史、神学など広範囲にわたる、約三十冊出版されているが、なかでも『技術社会』（*La Technique ou l'Enjeu du Siècle*, 1954. 英訳 *The Technological Society*, 1964.）、『都市の意味』（*Sans Fauti Lieu*, 1976. 英訳 *The Meaning of the City*, 1970.）（邦訳は両書共、すぐ書房刊）は今日まで欧米において多大の注目を浴びてきた。前者はエリユールの主著とも言うべき書物で、現代技術文明を社会学的に分析し、後者は都市の意味を創世記から黙示録をテキストにして探求し、都市文明に対する聖書の意味するところを鋭く示している。

本書『意志と行為』*Le Vouloir et le Faire*, 1964. Labor et Fides, Genève, 219 pages. 英訳 *To will and to do*, 1969（邦訳は三部のうち、第一部、第二部のみで、『現代キリスト教思想叢書12』白水社刊に収められている）は、善、道德の意味を聖書に照らして明らかにし、キリスト教倫理の可能性と必要性を論じている。この問題を扱う著者は一貫して聖書の立場にたとうとする。「私の思想の規準は聖書の啓示であり、思想の内容も聖書の啓示であり、出発点も聖書の啓示によってあたえられる、方法は聖書の啓示がわれわれにあたえられるときに用いられる弁証法的なものであり、目的は倫理に関する聖書の啓示の

意味を求めることである。」(原書八頁、邦訳九頁)

第一部においては、まず最初に、善の意味が明らかにされる。「聖書においては、善は神より以前には存在しない。善は神ではなく、善とは神の意志である。神の望むすべてのことは、神が善に従属し、この善に服従しているからではなく、ただたんに神が望むがゆえに、善なのである。」(原書一〇頁、邦訳一二頁) アダムを知る善が神の意志とは無関係であり、イエス・キリスト抜きでなされる善は、たとえ高邁な道德家によってなされる場合でも神の意志に合わないものであり、道德がわれわれに教える善は神の意志と同じものではない。この善はキリスト者と非キリスト者とのあいだの共通な尺度とはなりえない。社会正義、プロレタリアートや低開発国の国民の解放、生活水準や教育の向上など、今日、人びとが善と呼んでいるものはキリスト教とは一致しない。このような一時的、現世的な善の觀念にキリスト教を適合せようとすることは誤りである。これらは流行の問題であって真理の問題でないからである。「それ故、キリスト教徒がキリスト教を時代の道德的流行に適合させることによって、キリスト教を近代化しようとすることは受け入れることができない。」(原書六六頁、邦訳一一〇頁)とエリユールはキリスト教会の社会問題への対処の仕方に警告を発している。

神の意志が如何なる形でも表現されていない、まったく人間的で、現世的なこの道德は、それでもやはり必要であるとし、

邦訳一五四頁)

第二部では、この二つの道德を認める視野のなかで、人間的道德の特色を考察している。倫理的現象の現実が何であるかをあらゆる様相のもとで、その現状とその現存において考察することが必要であるとし、また、その表現、実行、權威において現実的行為である道德を理想や絶対置き換えることはできないとし、道德が人間を越えないこと、道德が人間に属するものであることを指摘し、道德現象を吟味するとき採るべき態度は「現実主義」であると主張している。

エリユールによれば、道德現象は多様な要素から成っている。集団のすべての人びとが避けることのできない客観性をもつものとして表わされる客観的道德には、体系、命令として定められている理論的道德、集団の要求の結果として起こる社会学的道德、集団が倫理の領域に伴ってくる慣習である道德的慣習があり、また、主観的道德には良心の命令と決定の選択がある。これらの要素の全体である道德現象を第二部で検討している。

この道德現象に今、変化が生じている。技術道德と呼びうる新しい形の道德の時代に入りつつある。「技術道德と呼ぶ理由は、この道德が人間の行動を技術世界と調和させ、技術の働きに応じて価値の新しい尺度を設定し、新しい徳を創る方向にむかっているからである。」(原書一五一頁、邦訳二四六頁)と指摘する。「技術社会」はエリユールの主著の書名であり、著者

「私たちは、主の御前ばかりでなく、人のまえでも公正であるように、気を配っている。」(第二コリント、八の21)とパウロがすすめている点を指摘している。また、この道德は人間が生存することを可能にする。そして、このことは、終末の時が至るまで、われわれのおかれていた世界を生かし、秩序を与え、住みやすくするのに適当であるならば、重要である。この世界は根本的には悪いが、住みやすくしなければならぬ。呼吸するのに適した空気、十分な食糧、調和ある秩序、人間相互の関係は本質的に必要である。キリスト者は人間であるのだから、この世界を住みやすくするために手を貸さねばならぬと著者は説く。

このように、もしも人間的道德の価値に積極的に同意するならば、キリスト者には二つの道德があることを意味する。一は神による善の啓示とそこから生じるすべてのもの、他は与えられた状況のなかでの人間による道德の構築である。エリユールはこれら二つの道德のあいだの関係を子細に検討し、キリスト者は彼が生きて、直面しなければならぬ人間的道德と神の意志とのあいだの緊張のなかに自らをおかねばならないとする。「この社会における二つの道德のあいだでキリスト者によって体験される緊張がおのずと、神の裂け目、すなわち、神が通過する裂け目であり、そのとき神の言葉はキリスト者の証しとしてきた人生において、キリスト者が生き、参加してきた社会において、神の要求を反響させるのである。」(原書九二―九三頁、

の重要な関心事であるが、ここでは技術社会における道德の特徴が描き出されている。

第三部では、まず最初に、キリスト教倫理の不可能性を認識せねばならぬとする。今日、キリスト教が道德宗教であると多くの人びとに認められているけれども、著者はキリスト教道德をつくることは不可能であり、啓示全体がそういう企てに反対しているし、如何に忠実なものであれ、そのような道德をつくることはイエス・キリストにおける啓示を裏切るものであることを確認することによって、キリスト教倫理の考察を始めなければならぬとする。人間によってなされる善は、たとえ如何なる聖者によるものでも神の意志とかけ離れたものであり、人間によってなされる如何なる道德も結局は神の命令を犯してなされたアダムのか「善悪を知る」行為の延長線上にあり、善をなそうとする人間の如何なる意図も正しくなく、ただイエス・キリストのみが正しく意志し、行為できるからである。

とはいえ、逆説的ではあるが、キリスト教倫理は必須であるとエリユールは言う。なぜなら、人間が御言葉に従って生きようとする場合、あるいは信仰を表明して生きる場合、生活における行為、何らかの業の遂行が問題となるからである。イエス・キリストによって罪の奴隷状態から解放されて自由人となることは何を意味するか、イエス・キリストに在って他者と出会い、他者に仕える可能性を回復することは何を意味するか、イエス・キリストによって世の終末を教えられ、神を言葉と思想

と行為において愛し、神に仕える可能性を回復することは何を意味するか、とのこれらの問いに答える必要性から免れることができない故、キリスト教倫理を探究する企ては不可避であろうとエリユールは説く。

本書全体を通じて、著者は聖書、特に旧約に精通しているのみならず、その他の領域においても極めて博識であることが随所でうかがい知られるが、それらの知識が聖書的立場から光が照らされ、批判されているのは興味深い。例えば、マルキスムにも通じている著者は、ソ連邦や毛沢東の社会主義にも著者の立場からユニークな批判を加えている。また、善、道徳などの根本問題を扱うとき、観念的思索に終始することなく、原典と歴史的現実とに即して考察がすすめられているの敬教えられるところが大きい。聖書的立場に厳密に立脚しようとする著者は墮落の重大さを軽視する現代プロテスタント神学の傾向、特にポール・リクルの主張を「イエス・キリストの十字架による贖罪の業」を矮小化するものとして批判している。また、世俗道徳との和解を試みるバルト神学は異端に通じる神学形成に至る危険性があるとして批判している。全体を通じて、バルト、ニールバー、ボンヘッファーなどから多くの引用があるが、とりわけバルトの影響が強いのは否めない。

(関西学院大学社会学部教授)

〔文献紹介〕

旧約学関係の文献紹介

——一九七五年以降——

一 邦文によるもの

西 満

最近旧約聖書の領域における内外の参考書がわが国でも大分出版されるようになった。これは旧約学を専攻する者にとって、また、その領域に関心を持つ者にとって、真にありがたいことである。ただ一つ残念なことは、それ等の多くは保守派以外からの出版物である。しかしまた福音派のサークルの中から、注目すべき書がいくつか発刊されつつある。

福音主義の立場にある者にとって現在一番関心が集まっている出版物は『新聖書注解』（いのちのことは社）旧約の部の出版であろう。既に新約の部は完結し、現在旧約の部の出版が進行中である。七四年に④「エレミヤ書——マラキ書」が、七五年に⑤「ヨブ記——イザヤ書」が出版され、この九月には⑥「モーセ五書」が出版されることになっている。予定通り七七年に⑦「歴史書」が発刊されると、旧新約全巻が揃うことになる。これは新改訳聖書刊行に次ぐ大きな事業であり、業績であ

る。しかも著者は全部聖書信仰に立つ日本人である。一部の例外を除いて全部が福音主義神学会の会員である。この書はもととは信徒を対象に企画されたものであるため、著述にあたっていくつかの制約を受けてはいるが、しかし実際には、教職者、神学生のためにも十分役に立つものである。そこには緒論的、批評学的、神学的諸問題が相当程度論じられている。個々の内容については、それぞれの執筆者によって多少の出来栄の相違があるのはやむを得ない。しかし旧約については非常に優れた作品が多く、それぞれの専門が生かされている。また、これだけのスケールで新旧約聖書の注解書が全巻揃うことは、日本のキリスト教会において初めてのことでないか。例えばイザヤ書は原稿用紙で千枚以上、創世記は千二百枚と聞く。これらをB6判の本にするとそれぞれ二冊の本になるだろう。この『新聖書注解』が日本の教会によって用いられると同時に、福音派の聖書学が、このことを通して、聖書信仰に立った学的業績をさらに伸ばされることを期待する。

注解書について更に触れると、『聖書講解全書』全二五巻（日基教団出版局）（B6判）は、本年三月、ネイピア著『出エジプト記』が出版されたことよって完結した。この全書は『レイマンズ・バイブル・コメンタリー』の翻訳であり、したがって、すべてが外国人の手による著作である。またその内容も『新聖書注解』と較べると大分簡略なきらいがある。

なお「信徒のための聖書講解——旧約」全二十巻（聖文舎）

は現在十二巻まで刊行され、予定では七七年までに完結することになっている。この方は主にルーテル派の（他派の者もいるが）学者、教師の手による著作である。このように旧約聖書に関する注解書が最近次々に出版されるようになったのは嬉しいことである。しかし、それが主に信徒を対象にしているところ、日本の教会が持っている一つの体質がある。

このことは個人による注解書についても言うことができる。

尾山令仁著『創世記——私訳と講解』（羊群社）は信徒向きの勝れた聖書講解書である。本書の巻末には創世記の私訳全訳が記載されており、信徒だけでなく、教職者にとっても大きな助けとなる。本文は本の厚さのわりにはそれ程詳しい釈義はなされてはおらず説教、又は奨励的性格が濃厚である。講解と名づけられるゆえんでもある。しかし創世記研究の中で長年問題とされてきたことは一応論じられ、その中で著者の鋭い洞察力を各所に見ることが出来る。

服部嘉明著『申命記講解』（いのちのことば社）も信徒を対象としたものであり、四五の説教單元にまとめられている。ついでながら米田豊著『旧約聖書講解』上・下（福音宣教会）が改訂出版された。これは既に戦前出版されていたものを、現代語に改訂したものである。

七四年ではあるが浅野順一氏の名著『ヨブ記註解』（創文社）が第四巻を出して完結した。『ヨブ記の研究』を入れると全部で五冊になり、全体で一五〇〇頁にもなる大作である。旧約に

おいてこのような本格的な注解書が出版されたのは筆者の知る限りでは初めてのことだと思ふ。このように考えると榎原康夫氏の創世記研究は、『創造と堕落』、『洪水とバベル』の続編を是非出していただきたいものである。ただし、これは全体が説教としてまとめられており、注の中で釈義の問題点が論じられている。また、この注にもう少し参考文献を載せてくれたらありがたいのだが。

西村俊昭著『ヨナ書注解』（日基教団出版局）はヘブル語を多く用いた教職向きの注解書である。著者は従来ヨナ書が（批評学者たちによって）捕囚以後の、偏狭なユダヤ教の排他主義に対する、普遍主義ないし、人道主義的寛容的精神のプロテストと解釈されてきたのに対して疑問を投げかけている。彼等が挙げる歴史的、言語学的論拠がヨナ書を捕囚以後のものとは決定し得ないことを指摘している。また、先にW・リュティの『アダム』、『アブラハム』、『ヤコブ』の創世記講解三部が出されたが、それに続いて『伝道者ソロモン——伝道の書講解説教』と『預言者アモス——アモス書講解説教』が続いて出版された。特に後者は同氏が第二次世界大戦前の緊迫した国際情勢の中で、バーゼルのエコラムパード教会においてなした講解説教であり、意義深い。

このところC・H・ファイファアの著書が続いて翻訳出版された。まず『旧約歴史シリーズ』全七巻（聖文舎）は『征服と定着の時代』（服部嘉明訳）をもって完結した。この書はブラ

イトの『イスラエル史』とは異なり、聖書の記事をそのまま事実として受けとめ、その出来事をその時代の歴史的、地理的資料に基づいて叙述している。旧約プロパーではないが『聖書地理』（聖書図書刊行会）も旧約の学びにとって大切な書の一つである。この種の本は保守派では初めてであり、内容、印刷、表装とも立派なものである。日本でも既に馬場嘉市氏の『聖書地理』が発刊されており、これは非常に勝れた力作ではあるが、聖書観の相違による解釈の問題点がいくつか見られ、保守派の学者による聖書地理が欲しいとかねがね思っていたところであった。ファイファアは古代近東の歴史文書、考古学に精通し、批評的学説をよく理解しながらも、聖書信仰に立つ学者で、こういった学者による著書が翻訳出版されたことは嬉しいことである。ついでながら彼はドロプシー大学でC・H・ゴードンの下に学び（哲学博士）、シカゴ大東洋研究所、ニューヨーク大学で学んでいる。しかし解説者の願いはさらにもっと本格的な聖書地誌の出版がなされることである。

保守派の本を紹介したついでに、少し古いが七四年に発売されたシュルツ著『旧約聖書概観』（聖書図書）も紹介しておこう。原書は一九六〇年にホイートン大学にて記されたものであり、旧約聖書を学ぶのに適切な参考書である。この種のものにパーカイザーの『旧約聖書の探究』（福音文書刊行会）があるが、これは明らかにアルミニウス派の立場から記されたものである。

この論評を書いている段階では未だ出版されていないが、ヴェルトヴァイン著『旧約聖書の本文研究』（聖文舎）が鍋谷氏の翻訳によって九月中旬に発行予定と聞いて楽しみにしている。

またもう一つ忘れてならないものに沢村五郎著『聖なる愛の歌——雅歌講話』（いのちのことば社）がある。著者は雅歌を解釈するにあたって「キリスト教的比喩説」をとっている。

福音派以外の出版の中で特筆すべきものは、日本聖書学研究所編『聖書外典偽典』全七巻・別巻一冊（教文館）であろう。旧約外典、偽典はキリスト教以前の理解に必須であるだけでなく、旧約を学ぶものにとっても大切である。旧約外典は聖公会からすでに出版され（文語）、バルバロ訳聖書にも一部含まれているが、この度は偽典及び新約外典も含まれて企画された。

C・ヴェスターマン編『旧約聖書解釈学の諸問題』（日基教団出版局）は、旧約聖書の理解をめぐる問題に取り組むための文献的基礎を提供するワークブックを意図して企画出版されたものである。本書にはフォン・ラート「旧約聖書は歴史書である」、ヴェスターマン「旧約聖書の解釈」、ノート「宣教における旧約聖書の現在化」、ツインメルリ「約束と成就、パウムデルテル「旧約聖書の解釈学的問題」、ヴォルフ「旧約聖書の解釈学について」、フリーゼン「神権政治と救済論」、アイヒロツト「予言論的釈義は適切な釈義か」等の論文が収集されている。この論文集の基調になっているものは「旧約聖書は歴史書

である」という命題である。しかしその歴史とは「イスラエル自身が神の歴史の中に捕えられ、そこで神のことばによって約束から成就へと導かれていくものとして理解した」という意味での歴史書である。だから、歴史に対する神の働きかけを、神のことばとの関連において扱えなければならぬ。これが旧約解釈に関する今日の問いの根本問題であるという。

論文集といえ、日本聖書学研究所編『聖書論集』十一は「聖書における個と共同体」のもとに論文が記されているが、その中で旧約に関しては以下の学者たちが寄稿している。関根正雄「旧約思想の特質」、守屋彰夫「古代イスラエルの共同体形成——メンデンホルのひき上げ説を中心に」、月本昭男「族長宗教の一面——創世記一五章の宗教史的解明の試み」。また『日本の神学』14では、関根正雄氏が「イスラエル思想史について——その概念、方法、適用」について論じている。同氏はイスラエルの思想史の研究方法には二つが考えられるという。一つは出来るだけ一般思想史の方法を学びつつイスラエル思想史を展開するものであり、他はイスラエル神学思想史として、神学諸分野との関連においてこれを叙述するものである。そして後者は前者の成果をふまえて構築さるべきである。更に同氏は、イスラエル思想史を社会文献学の上に構築さるべきであると考へ、特にマックス・ヴェーバーの理解社会学の方法を主たる方法として考へる。これを論じるにあたって彼は出エ二〇二——二三三のいわゆる「契約の書」を例として取り上げ

る。

論文集を紹介した以上は福音派の学者の論文も紹介しなければ片手落ちというものだろう。『福音主義神学』6には津村俊夫氏が「ウガリトと旧約聖書」という題でカナン文化・宗教を、ウガリトと旧約聖書との関連で論じている。著者はまずウガリト語がオルブライト等が主張するようにカナン語の一つではないにしても、北西セム語に属することは事実であるとし、その事実のゆえに、ウガリト学が旧約聖書の解明に与えて来た幾つかの例を挙げる。津村氏はブランドイス大学でC・H・ゴードンの下にセム語、特にウガリト語を専攻し博士号を取得、現在筑波大学、聖書神学舎で教鞭をとっている。こういった少壮気鋭の学者が福音派にも与えられていることを感謝し、わが国でもこういったウガリト文書を手掛りとするヘブル語研究が今後大いに進められることを期待したい。なお同氏は『オリエン』十七・二（一九七四年）で「ウガリト文書UT52の解釈に関する方法的諸問題」を発表している。

『改革派神学』11では安田吉三郎氏が「ヨブ記における苦難の神義論」を記している。安田氏は論文の中で、カント、有賀鉄太郎、マックス・ヴェーバー、関根正雄のヨブ記の神義論を紹介し、その論述を評価しながらも、ヨブ記理解の出発点、神とヨブとの間に主としもべという契約関係があったということを知ることであり、したがって、「苦難の神義論も、聖書的な契約との関係においてのみ成立するものである」と結論づけ

ている。なお安田氏は『新聖書注解』でも「ヨブ記」を担当し優れた注解をしておられる。

評者が奉職する東京キリスト教短大の『論集』7（七五年）、8（七六年）では、樋口信平氏が「第四歌の苦難のしもべ」、「イザヤ研究I」と続いてイザヤ書に関する研究を発表している。樋口氏はこの十年來イザヤ書に関する研究に取組んできた方であり、今後の研究発表を期待したい。また「イザヤ書研究」ではイザヤ書の著者問題を論じ、その統一性を擁護する立場をとっている。イザヤ書の統一性の問題は五書の著者問題と共に旧約学の中における大きな問題であり、一時は批評学的学説が大勢を占めたほどである。しかしこういった問題が更に新しく論じられていることは嬉しいことである。なおイザヤ書については鍋谷堯爾氏も多年研究を続けてきており、『新聖書注解』の中で執筆を担当している。なお同『論集』の中その他旧約関係の論文には拙論『出エジプト記における諸問題——イスラエル人のエジプト滞在期間と、出エジプトに参加した人数の問題について』と、「十戒——結論的諸問題の概観とその簡単な釈義」がある。

七四年に発刊されたものであるが、大阪キリスト教短大の『神学と人文』に服部嘉明氏が「Johann F.K. Keilの旧約聖書観」を記している。氏はカイルが(1)旧約聖書を靈感を受けた神の言葉である啓示の書として受け入れ、(2)旧約全体及び各巻の統一性、信憑性を強く主張し、(3)可能な限り科学的——学究的

方法論を用いていると結論づけている。

もう一度単行本に筆を戻そう。翻訳ものでは、R・E・クレメンツ著『預言と契約』（教文館）が発行されている。著者は英国の旧約学者で、原書は六五年の発行であるが、現代における預言者研究の問題点を把握するために極めて適切な書である。

更にH・リングレン著『イスラエル宗教史』（教文館）が発行された。著者はウプサラ大学神学部の教授で、ウプサラ学派の旧約学者である。原題は「イスラエル宗教」であるが、著者の意図は旧約神学の叙述にあるのではなく、イスラエル宗教史である。著者は序論の中で、イスラエル宗教史研究の課題と方法を述べ、イスラエル宗教の歴史的進展とイスラエル内部における種々のグループ間の緊張関係を視野に入れることを強調し、また聖書の批判的検討と古代宗教との比較研究が必要不可欠であると記している。だから本書では常に聖書の記事の史実性が問われる。

津村氏のウガリト研究については前述したが、ウガリト研究の大家であるC・H・ゴードン著『ウガリト文学と古代世界』（日基督教団出版局）が出版された。本書は訳者が記しているように「原資料に基づいて書かれたウガリト学入門書」である。ゴードンの著書は以前にも『聖書以前——ギリシャ・ヘブライ文明の背景』（みすず書房、一九六七年）が出版されているが、こういった書物が日本でも次第に多く出版されるよう

になったことは嬉しいことである。また古代近東の考古学に關係する書物も近年多く出版されている。少し古いがC・W・ツエーラムの『神と墓の古代史』(法大出版局、七二年)は近東における考古学の歩みの概観を知るのには手頃だし、七五年以降では山形孝夫『レバノンの白い山』(未来社)、J・マッキー『バビロン』(法大出版局)、R・シルバァバーク『埋もれた古代文明』(法大出版局)等も手頃な参考書として用いることができる。

その他講解説教双書として竹森満佐一著『ダビデ——悔いなくおれし者』(日基督教団出版局)、聖句研究として書かれたものを一冊の本にまとめた左近淑著『混沌への光——現代に語りかける旧約聖書』(ヨルダン社)が刊行されている。

最後に、一九六九年—七四年までの日本における旧約学における著書、論文を知りたい向きは『日本の神学』13を参照されたい。そこには「旧約学の最近の成果と展望」という題で、並木、木田、関根の三氏がそれぞれ「神学・思想」、「緒論・釈義」、「歴史・言語」關係を担当して記している。ただし、そこには保守派の著作の紹介は皆無である。こういったことが、日本の教会を二分してしまう一つの不幸な原因にもなっているのである。また他面それ故にこそ日本福音主義神学会の存在理由があるのかもしれない。

二 英文によるもの

とができる。デーウィズの他の注解書もそうであるように、古代近東の資料を豊富に用い、現代の学的な成果を十分に考慮に入れながら、保守的伝統的立場を堅く保って、この創世記の注解を記している。なおこれと全く対照的なのが、ヴァン・セター(John Van Seter)の *Abram in History and Tradition* (Yale) である。ヴァン・セターによるアブラハムの記事は本質的には歴史学的というよりも伝承である。著者はオールブライト等により考古学的考証を拒け、グンケルやノート等の方法論を受け入れる。その他モーセに関する著述として以下のものを紹介することができよう。Elias Auerbach, *Moses* (Wayne State University); Thomas Kenally, *Moses, the Lawgiver* (Harper & Row); David Daiches, *Moses, the Man and His Vision* (Praeger). また、ライントナル旧約注解シリーズの1つとして J.A. Thompson, *Deuteronomy* (Inter Varsity) が、また *The Torah* のタイトルで出版される五書注解の最初の本として W. Gunther Plaut, *Genesis* (Union of American Hebrew Congregations) がある。

歴史書ではアンカー・バイブルシリーズの中のルツ記が出版された。Edward F. Campbell, *Ruth* (Doubleday). 著者はルツ記を歴史短編小説として取扱っている。これに対して七四年に発刊されたものではあるが、ルツ記との関連を中心にして旧約聖書における「エヘール」の思想の研究をつづける Donald A. Legget, *The Levirate and Gool Institutions in the Old Testa-*

与えられた紙数の関係上、英文の参考文献は、福音派に属するものを中心に、必要に応じてその他のものも紹介することにする。

まず旧約神学の領域では Simon J. DeVries, *Yesterday, Today and Tomorrow* (Eerdmans) が出版されている。本書は「日」、「今日」、「ヤハウェの日」といった言葉の意味論に関する研究である。著者は単なる言葉の研究にとどまらず、思想的観点からも幅広い研究を進めている。神学の関係で言う一つ、福音派のものではないが、D.G. Spiggs, *Two Old Testament Theologies* (SCM) を紹介しておく。本書は旧約学界の大立物フォン・ラート、アイヒロットが提示する旧約神学の問題点を理解するのに良い案内書である。

緒論関係では Howard F. Vos が *Beginnings in the Old Testament* (Moody) を記している。本書は旧約聖書の生い立ちを叙述的に記しているもので、学生のために、各章の終りに幾つかの設問がなされている。比較的大きなものに Otto Kaiser, *Introduction to the Old Testament* (Augsburg) がある。著者はアイスフェルト、M・ノート、ヴァイザー(邦訳あり)等のドイツの学風の流れを汲む者であるが、前三者の著書に較べると本書は啓蒙的な性格を持ち、分りやすい。こういった批評学の見解を学ぶためには良い参考書といえるかもしれない。

五書関係ではまずグレース神学校教授 John J. Davis の *Paradise to Prison: Studies in Genesis* (Baker) を挙げる。

ment with Special Attention to the Book of Ruth (Mack Publishing Company) は大変興味深い。また士師の時代を記したものに Leon Wood, *Distressing Days of the Judges* (Zondervan) が刊行されている。著者は士師記の時代に関する諸問題に正面から取り組んでいる。同じ士師記を説教の面から取扱った小冊子 John Hunter, *Judges and a Permissive Society* (Zondervan) がある。また Francis A. Schaeffer による *Joshua and the Flow of History* (Inter Varsity) も出版された。シェーファーはこのところ引き続いて聖書講解に興味を向けている。なお本書は一語一語の注解ではなく、大筋を把握してゆく、講解的色彩が強く、またシェーファー独特の鋭い哲学的思考を随所に見出す。列王記に関する注解書としては Walter Wifall, *The Court History of Israel* (Clayton) がある。本書には言語学的、考古学的研究成果を用いながら、鋭い洞察と注解がなされている箇所が幾つか見出されるが、しかし著者が意図する神学の面を描えるには少々短か過ぎる嫌いがある。

預言書の領域では一九七五年中には大きな注解書は出版されなかった。しかし福音派以外から、注目すべき研究書が幾つか出版されているのでそれらをまず紹介してみよう。まず William L. Holladay, *Jeremiah: Spokesman Out of Time* (Pilgrim) を挙げる。著者はエヘリヤを第二のモーセであるとし、その活躍した時代をエホヤキムの時代であるとする(エヘリヤをエヘリヤの召命ではなく、出生であると解

釈する。その他四人の学者の著述を紹介している。A.S. Kapehnd, *The Message of the Prophet Zephaniah* (Oslo: University Press); W. Zimmerli, *Ezekiel Among the Prophets* (SCM); Jack R. Lundbom, *Jeremiah: Study in Ancient Hebrew Rhetoric* (Scholars Press); R.E. Clements, *Prophecy and Tradition* (John Knox). 彼の他の一般的な参考書として、また、その三冊の本を挙げるには、Frederick A. Tatford, *Prophet of a Broken Home* (Eastbourne, Sussex: The Prophetic Witness); Roy L. Honeycutt, *Hosea and His Message* (Broadman); James W. Sire, *Jeremiah, Meet the 20th Century* (Inter Varsity).

聖文書の関係では、ティンダル旧約注解シリーズの中の詩篇の後半が出版された。Derek Kidner, *Psalms 73-150* (Inter Varsity). 本書は詩篇を学ぶのに手頃な注解書である。もう少し平易な注解シリーズにムンディ出版社の『エヴリマンズ聖書注解』がある。そしてこの中の詩篇の一部が出版された。その他雅歌に関する参考書としては以下のものがある。Mike Gemme, *Song of Love* (Victor); Bob Dryburgh, *Lessons For Lovers in the Song of Solomon* (Kens); Dhimitri Zonia, *Arise My Love* (Concordia). なお最後のものは図解入りのものである。

最後に新英訳聖書を基調とするケンブリッジ聖書注解は以下のものが出版されたことによって完結した。James D. Martin,

The Book of Judges; Wesley Furst, *The Books of Ruth, Esther, Ecclesiastes, The Song of Songs, Lamentations: The Five Scrolls*; Norman Habel, *The Book of Job*; A.S. Herbert, *The Book of the Prophet Isaiah, Chapters 40-66*; Ernest Nicholson, *The Book of the Prophet Jeremiah, Chapters 26-52*; John D.W. Watts, *The Books of Joel, Obadiah, Jonah, Nahum, Habakkuk, and Zephaniah*.

(福音主義神学会書記)
(東京キリスト教短大助教授、同図書館長)

ナグ・ハマディ文書の研究状況報告

永田 竹司

いわゆる「ナグ・ハマディ文書」は、約二年後に発見された死海写本ほど一般の興味を引きつけることなく、ただ少数の研究者の間でのみ知られてきた感がある。その主な理由として、コプト語の知識が少数の学者に限られていたこと、また、アラブの政治不穏など、種々の私的公的理由によって、文書の出版が遅延したことなどがあげられるであろう。

しかし、過去十年余りの間に、本文及び翻訳等の出版に伴い、その研究状況も進展した。この新資料は、グノーシス主義

それ自体、非主流派ユダヤ教、そして原始キリスト教と、それらの相互関係性の研究に貴重な意義を持つと考えられている。したがって、ここにナグ・ハマディ文書研究の状況を知ることには、有益と思われるので、文書の一般的紹介をかねて、それらを簡単に報告してみたいと思う。なお紙面の限界から、詳細な問題に触れることは困難なので重要と思われる参考文献を「注」に紹介することにより、その課題を果したい。

一 文書の発見と発行現状

一九四五年、上部エジプトで十三冊の文書が発見された⁽¹⁾。発見の翌年ドレス(J. Doreese)が、それはグノーシス主義文書であることを確認し、一九四八年にカイロプレスで新文書発見が公表された。これがいわゆる「ナグ・ハマディ文書」であり、その名前は発見地と推定される場所へ行く為に汽車を降りる町「ナグ・ハマディ」に由来する。

手違いから新文書中のコデックスI (CG・1)⁽²⁾は、エジプト国外に渡り、それをユング研究所が購入し、現在一般に「ユングコデックス」として知られている。この書を除いた全文書は、アラブ連合共和国のコプト博物館に保管されている。これらの写本の年代は一般に四世紀頃とされていたが、パピルス学者バーンス(W.B. Barns)の最近の予備報告によっても支持される⁽³⁾ことが明らかになった。

一九五六年、批評版出版計画に基づき、コプト博物館は十数

の文書の写真複写版を出版した。一九六一年ユネスコがナグ・ハマディ文書発行に参加することになり、新たに全文書の写真複写版を発行することになった。そして、アラブ連合共和国とユネスコとの協力のもとに、一九七二年、表紙(縮尺)、ホリオ版(folios)本文(原寸大)、そして未確定断片の順序でCG・VIとVIIが出版された。翌年七三年にはCG・XI・XII・VIIIが一冊としてまとめられ、さらに七四年にCG・IIが発行された⁽⁴⁾。したがって、一九五六年に発行された十三文書と共に合計四十二文書が原典写真版で有効になった。

編集作業も進展し、CG・IからVIIまでは、ほとんど個々に出版され、一九七五年末には三十五文書が翻訳出版されるに致った。

これからの出版計画としては、全文書のドイツ語訳をクラウゼ(M. Krause)が全三巻で発行予定、フランス語版はすでにカサ(R. Kasser)が⁽⁵⁾「Revue de théologie et de philosophie」の中で出版を開始した。また、アメリカのクレアモント大学を本拠に研究及び発行活動が開始され、CG・IからVIまでの英語訳国際版を二巻で発行し、VIIからXIIまでを三巻で出版することを決定した。また、一九七一年以来オランダのブリル社から、ナグ・ハマディ研究の専攻論文シリーズが発行され、第一に一九四八年から六九年までに公表されたナグ・ハマディ文書及びグノーシス主義研究の文献集が出版された。さらに毎年補足版として「Novum Testamentum」に新文献が追加されてお

り、一九七五年号の第五回補足までに、書評を含め、三千四百八十五の文献が掲げられている。

二 ナグ・ハマディ文書目録

ロビンソンの最近の記事に拠れば、埋蔵されたナグ・ハマディ文書は「十二のコーデックスと一文書(前コーデックス^{XII})⁽⁹⁾」として失なわれた一つのコーデックス(XII)の断片が残っている。」と言われるべきであろう。また最近、英語訳国際版の最新公的目次が「Bibliographia Gnostica, Supplementum V」⁽¹⁰⁾に公表された。それにより、個々の文書の行数など、約二十箇所を変更すべき事が明らかになった。特に従来「不正について」の題で知られていたCG・VI・5はプラトンの「国家」(Republic 586B-589B)であることがシェンケ(H.M. Schenke)によって識別され題名も改められた。また、CG・Xは従来二文書から成ると考えられていたが、一頁一行目から七八頁十八行目までの一文書で「マルサネス」(Marsanes)と改題された。したがって、ナグ・ハマディ文書数は五三ではなく、五二文書ということになる。

三 ナグ・ハマディ文書のグノーシス主義

ナグ・ハマディ文書の歴史的、内容的意義は、グノーシス主義研究全体の文脈の中でのみ明確に理解できると言える。

ブルトマンがグノーシス主義救済者神話を、宗教史学派を代

表するライツェンシュタイン(R. Reitzenstein)の説に従い再構成し、新約聖書(ヨハネ福音書、パウロ書簡など)のキリスト論はグノーシス主義の救済者神話を採用してイエスへの信仰によって修正したものであると主張した⁽¹²⁾。これにより、グノーシス主義と原始キリスト教史、及び新約聖書との関係性をめぐる重要問題を投げかけたのは周知のことである。

この点、たしかにナグ・ハマディ文書から、グノーシス主義は発生的に、本来非キリスト教的であったと言うことが明らかにしつつある。そこには、非キリスト教的(non-christian)と思われる文書が含まれ、さらに、キリスト教的の粹(例えば復活後の主が弟子達に与える啓示、という設定)を持ちながら、内容的には非キリスト教的なものや、「真理の福音」のように明らかにキリスト教的グノーシス主義文書でありながら、キリスト像は二義的ではない⁽¹⁵⁾、と思われる文書も見出されるからである。

しかし、宗教史学派が強調したイランの要素よりは、アダム、セツ、セムなどの像や、旧約聖書(特に創造物語)のグノーシスの解釈が文書中において重要な役割を果すことが目立つ。また、主の兄弟ヤコブに啓示の権威づけを求める黙示文学や、「ヘブライ人」を讀者とする「ピリポによる福音書」などから、グノーシス主義の背景に、ユダヤ教、あるいはユダヤ教キリスト教を指示する要素が多く、イタリアのメッシーナ大学で開かれた「グノーシス主義起源に関する国際コロキウム」に

おいても、ユダヤ教周辺の重要性が強調された⁽¹⁶⁾。とくに、ベルリンコーデックス(BG)の中にすでに知られていた明確なキリスト教的設定をもつ「イエス・キリストの知恵」はナグ・ハマディ文書中にも存在し、それは非キリスト教的グノーシス主義文書「聖エウゲノストスの手紙」(III・3, V・1)のキリスト教化されたものであることがほぼ確実と思われ、さらに「ヨハネのアポクリフォン」がBG中のものと合わせて、四つの異本の形(II・1, III・1, IV・1そしてBG)で現存している

ことから、ユダヤ教的グノーシス主義からキリスト教的グノーシス主義への変化を文献批判的に証立立てる為の重要な資料と考えられる⁽¹⁸⁾。

また、ブルトマンの主張する「救済された救済者」神話は、方法論的にも資料的にも支持されない事は新資料に基づくコルベ(C. Golpe)などの業績により明確にされたが、ナグ・ハマディ文書においても救済者像は多様であり、「救済された救済者」「原人」そして仮現説の総てを全体として持つ救済者神話は見出されない⁽²¹⁾。同じく資料的根拠を持たないキリスト教成立前の救済者神話を前提とし「アダムの黙示録」をキリスト教成立前の文書であるとするベリッヒ説は一般的に否定されている⁽²²⁾。

また「セムスの釈義」に関するビッセ(F. Wisse)の主張⁽²³⁾にも同様な批判があてはまるであろう。むしろ、マクレイ(G. Mac-Rae)はグノーシス主義のソフィア神話の背景をユダヤ教知恵神話と創世記のイブの墮落物語のグノーシス主義的解釈の統合

により成立したと考える。この説は、ブルトマンの救済者神話説に変わる興味深いものと思われる。

しかし、グノーシス文書には「国家」や「セクストウスの金言」などの全く非グノーシス主義的なものから、「シルバヌスの教え」や「魂の究明」などグノーシス主義的性格が明確でないものも見出される。しかも、文書埋蔵に関する史的社会的状況も不明瞭なため、新文書全体のグノーシス主義理解に対する確かな意義を知る為には、パリオグラフィを含めさらに多くの研究が必要であろう。

結 論

現在のところ、キリスト教成立以前のグノーシス主義と思われるものは知られておらず、それに即する救済者神話も見出されていない。しかし、また直接資料として、異本や校訂版等が有効になった今日、文献批判的研究を単に仮説的として無視することも許されないであろう。啓示の神のみでなく、歴史の主でもある神を信じる福音主義者は、キリスト教起源と新約聖書思想に関する重要な問題を提起するグノーシス主義を、資料的に究明していく義務があろう。

付 記 福音主義学者の研究紹介

福音主義者によるグノーシス主義研究は、色々な記事に発表されているが、以下に特にナグ・ハマディ文書と関係ある書物

や記事を幾つか紹介したい。

一 D.M. Scholer による文献集。グノーシス主義研究に欠かせない道具。(注8を参照)

二 Helmbold, A., *The Nag Hammadi Gnostic Texts and the Bible*. (Grand Rapids, Michigan, Baker, 1967). 不確実なところも多くあるが、文書の写真なども取り入れられた良き入門書。記事には、"The Apocryphon of John: A Case Study in Literary Criticism," *Journal of the Evangelical Theological Society* 13 (1970), 173-79, "Translation Problems in the Gospel of Philip," *NTS* 11 (1964/65), 90-93 等がある。英語国際版では「エペソの福音」の二つの異本の解説を掲げている。

三 Yamauchi, E., *Pre-Christian Gnosticism*. (Grand Rapids, Michigan, Erdmans, 1973) エペソ派にまつ提唱されたキリスト教成立前のグノーシス主義主張は資料的証拠に欠ける点論である。その他は、"The Gnostics and History," *Journal of the Evangelical Theological Society* 14 (1971), 29-40, "The Comparison of Certain Elements in Mandaic and Coptic Gnostic Sources," in *Proceedings of the Twenty-Seventh International Congress of Orientalists, Ann Arbor, Michigan, 13th-19th August, 1967* (ed. D. Sinor et al.; Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1971), 151-52 などがある。四 聖書 F.F. Bruce, G.F. Wright, G.L. Borchert, T.E.

McComisky 等の記事があるがそれらに関しては、D・M・シラー著、上掲書を参照。

注

- (1) 発見、及び出版状況についての最新の報告は、エネスコ写真版の総合序論、Robinson, J.M., "Introduction," in *Facsimile Edition of the Nag Hammadi Codices, Codex VI*. (Leiden, E.J. Brill, 1972) を参照。
- (2) エペソにあるコプト語グノーシス主義ペピルスが BG (Berolinensis Gnosticus) の記号で表わされているのに類似して、ナグ・ハムマディ・コプト語グナストス(CG(Caïrensis Gnosticus)) は、コプト語の番号、及び、その中の個々の文書を、それぞれロー数字、算用数字で表わすのが一般である。
- (3) コプト語文書のほとんどは、ギリシャ語からの翻訳であることから、本文それ自体の執筆年代は、むしろやかのである。
- (4) *The Facsimile Edition of the Nag Hammadi Codex. Codex VI*. (Published under the Auspices of the Department of Antiquities of the Arab Republic of Egypt in conjunction with the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, Leiden, E.J. Brill, 1972). *Codex VII, 1972, Codices XI, XII, and XIII, 1973, Codex II,*

1974.

(5) Labib, P., *Coptic Papyri in the Coptic Museum at Old Cairo*. Vol. I. (Cairo, Government Press, Antiquities Department, 1956).

(6) *RTPh* 14 (1964), 140-50 以下を参照。Bibliothèque gnostique エペソの福音に於けるグノーシス。

(7) Robinson, J.M., "The Institute for Antiquity and Christianity," *NTS* 16 (1969/70), 178-95 以下。一応頁数を参照。

(8) Scholer, D.M., *Nag Hammadi Bibliography 1948-1969* (Leiden, E.J. Brill, 1971). 毎年の補足は、*Novum Testamentum*, 13 (1971), 322-36, 14 (1972), 312-31, 15 (1973), 327-45, 16 (1974), 316-36, 17 (1975), 305-35. (9) Robinson, J.M., "Inside the Front Cover of Codex VI," in *Essays on the Nag Hammadi Texts in Honor of Alexander Böhlig* (ed., Krause, M., Leiden, E.J. Brill, 1972), pp. 74ff.

(10) *Nov. Test.* 17 (1975), pp. 305ff.

(11) *Bulletin of the Institute for Antiquity and Christianity*, No. 6 (Feb. 1973), p. 9.

(12) Bultmann, R., "Die Bedeutung der neuerschlossenen mandäischen und manichäischen Quellen für das Verständnis des Johannevangeliums," *ZNW* 24 (1925), 100-46.

(13) 例えば「プロダネ」(IX・8)「ガタの釈義」「アタタの釈義」「ヤン・ツ・ツ」(IX・5)「聖・全キリスト」(IX・2)。

(14) 「エペソの福音」の「エペソの福音」の「エペソの福音」(H・5)「エペソの本質」(H・4)など。Krause, M., "Der Stand der Veröffentlichung der Nag-Hammadi-Texte," in *Le origini dello gnosticismo: Colloquio di Messina 13-18 Aprile 1966: Testi e discussioni* (Bianchi, U., ed., Supplements to Numen 12, Leiden, E.J. Brill, 1967), pp. 75ff. 参照。

(15) 荒井献著『原始キリスト教エペソ派の福音書』岩波書店、一九七一年、二九頁以上を参照。

(16) エペソ派研究は、その重要性を全羅の「Mac-Rae, G., "Gnosis in Messina," *CBQ* 28 (1966), 322-33 以下に示す。

(17) Krause, M., "Das literarische Verhältnis des Egnostobriefes zur Sophia Jesu Christi: Zur Auseinandersetzung der Gnosis mit dem Christentum," *Mullus: Testschrift Theodor Klauser* (JbAC, Ergänzungsband 1; Münster, Westfalen: Aschendorffsche Verlagsbuchhandlung, 1964), pp. 215-23.

(18) 「エペソの福音」に関するすべての文献批判的研究の例として、荒井献著、上掲書、一九六二—一九

参照。

- (6) Calpe, C., *Die religionsgeschichtliche Schule. I. Darstellung und Kritik ihres Bildes vom gnostischen Erlöser-mythos*. (Göttingen: Vandenhoeck & Rupprecht, 1961).
- (20) 例えば、ソフィア・フォーステール、オノマ・セツ、そしてキリストなど。
- (21) 荒井献著、上掲書、三一九—三六頁参照。
- (22) Wisse, F., "The Redeemer Figure in the Paraphrase of Shem," *Nov. Test.* 12 (1970), 130-40.
- (23) 箴言八・三六、ベン・シラ二八・一一二、ソロモンの知恵六十章、ハルーク三・九—四・四、第一エノク四二・一—三三。MacRae, G., "The Jewish Background of the gnostic Sophia Myth," *Nov. Test.* 12 (1970), 86-101 を参照。

(東京キリスト教短大卒、

プリンストン神学校博士課程在学)

最近の組織神学関係の文献

宇田 進

かつて本誌第四号(一九七三年刊)に、当時の福音的な組織

神学部門関係の文献に関する紹介文を書いたので、今回は主としてそれ以後に出版されたものに焦点を合わせてレポートしたいと思う。

一 「福音主義」の理解・評価について

「最近二十五年間における福音主義の復興」(カール・ヘンリ)というところが、今やキリスト教界の話題となっていることは周知の事実であるが、それと同時に、「福音主義とは何か」をめぐって福音派内部における自己同一性の探求に関するものと、精力的な展開を見せている福音主義運動に対する種々なる立場からの評価について書かれたものが、最近とみに多くなっている。

まず評価に関しては、いわゆる右よりの極端なファンダメンタリスト(この呼び名は、時と場合と用いる人によって意味内容がかなり変わってくるので、その都度説明が必要となってくる。)は、最近の福音主義の積極的な展開を歴史的キリスト教もしくは聖書の信仰からの逸脱であるとして、きわめて批判的な態度をとっている。

一方、リベラルな立場からのものとしては次のようなものがある。まず少し古いものではあるが、Stewart G. Cole: *The History of Fundamentalism* (R.R. Smith, 1931) や Norman F. Furniss: *The Fundamentalist Controversy 1918-1931* (Yale, 1954) の二者は、福音主義を非開化論者扱いしている点

を共通している。Willard M. Sperry: *Religion in America* (Macmillan, 1948) や William G. McLoughlin: *Modern Revivalism—Charles G. Finney to Billy Graham* (Ronald, 1959) は、第二次大戦後の一時的現象とみている。Ernest R. Sandeen: *The Roots of Fundamentalism—British and American Millenarianism 1800-1930* (Univ. of Chicago, 1970) は、「ビリー・グラハム教」の派生物とみている。そのほかに福音派の歴史的伝統をより公平に評価しているものとして Robert T. Handy, H. Shelton Smith, and Loefferts A. Loetscher, ed.: *American Christianity—An Historical Interpretation With Representative Documents* (Scribner's, 1960, 1963) など。

やがて「福音主義」という場合それはいったい何をさすのか。その歴史的伝統・系譜は、その教理的特質は、その本来的体質は、これらの問題は、日本においても問われつつある重要な問題であるが、今日、海外の福音派世界においてかなりの論議を呼んでいる。時間的な順序にそって主な文献をあげてみる。次のものがある。しばらく前にカナダ、アメリカ、オランダの改革派長老派系の若手学者が中心となって、カナダのトロント市に Association for the Advancement of Christian Scholarship という組織と The Institute for Christian Studies という名称の大学院レベルの学校がつけられ、キリスト教有神論的世界観にもとづいた諸学の今日的確立と改革派教会の刷

新を目指して、注目すべき活動がなられてきている。その群から教会の本来の今日の在り方をテーマとした *Out of Concern for the Church* (Wedge, 1970) や *Will all the King's men...* (Wedge, 1972) を題してなされたチャレンギングな論文集が出されている。同リファーマー系のもので、最近 *The Journal of Christian Reconstruction* という名称の研究誌(年二回各一六〇頁前後、G. North 編集、Chalcedon 刊)が多くの注目を集めている。すでに三号が出っており、それぞれ創造論、サタン論、キリスト教的経済学を特集形式でとりあげている。

次に広い意味での福音主義の問題を扱ったものとして、Donald Bloesch: *The Evangelical Renaissance* (Berdnans, 1973), Bernard Ramm: *The Evangelical Heritage* (Word, 1973), Richard Quebedeaux: *The Young Evangelicals* (Harper and Row, 1974), David Wells and John Woodbridge, ed.: *The Evangelicals* (Abingdon, 1975) が次々に出版されてきた。ここに関連した内容を考慮して、カーネルの福音主義を分析批判している Cornelius Van Til: *The Case For Calvinism* (Presbyterian and Reformed, 1964) やローザヘン会議の公式資料集 *Let the Earth Hear His Voice* (World Wide, 1975) など、ジョン・ストット『ローザヘン誓約・解説と注釈』(このものは社「一九七六」を含めておきたい。Bloesch は、はじめに福音主義の根本的特質を述べたあと、全体を通じて対話と開放的姿勢の必要を訴えているが、特に注目

すべき点といえは敬虔主義やピューリタニズムに与えている彼の積極的評価と、それと福音主義の結びつきを明らかにしている点ではないかと思う。Quebedeaux のものは、ネオ・オランダキシーの立場を鋭く批判しながら、あわせて固定化した伝統的福音主義を越えて、福音の社会性を強調しながら「正統主義の革命」を訴えている。文字通り若年層から出された提言書といった感じの意欲作である。Wells と Woodbridge 編集のものは、やや統一性を欠くが十三の論文から成る今日の福音主義に関する啓蒙的なシンポジウムである。

以上のうち、福音主義の自己同一性と展望の問題をもっともコンプリヘンシブな形で取扱っているものがラムのものである。ラムは、福音主義神学を根本的には宗教改革の神学に由来するものと規定したあと、十七世紀のスコラの正統主義における福音主義的遺産、正統主義に与えた啓蒙主義の打撃、十九世紀の自由主義神学との対決、ネオ・オランダキシーの評価等の問題を論じ、最後に、福音主義神学の正しいベース・クティブと将来の課題と展望の問題にメスを入れている。特にこの最後の二章は、すべての神学生と教職者に一読をおすすめしたい部分である。

二 組織神学関係

聖書の信仰の立場からの本格的な神学序説(プロレゴメナ)は、カイパー、ベルコフ、ヴァンティルのもの以外にまだ新

しいものは出ていないが、序説の中で取扱わなければならない信仰告白の位置づけの問題に関する参考書が最近出版されている。John Skilton, ed.: *Scripture and Confession* (Presbyterian and Reformed, 1973) がそれである。信仰告白の位置づけの問題を真正面から取扱っている福音的な文献がほとんどない現在、本書はよき案内書の役を果たさるう。ついでに長年絶版となっていた Warfield: *Westminster Assembly and Its Work* がつい最近再版されたこと、雨宮榮一『ベルメン宣言——メソヂアン教会闘争史序説』(日基教団出版局、一九七五)の出版を記しておきたい。

聖書論は福音主義神学のアキレス腱である。最近出たものには Clark Pinnock: *Biblical Revelation—The Foundation of Christian Theology* (Moody, 1971), Dewey Beegle: *Scripture, Tradition and Infallibility* (Eerdmans, 1973), John Montgomery, ed.: *God's Inerrant Word* (Bethany, 1974), Jack Rogers: *Confessions of a Conservative Evangelical* (Westminster, 1974), G.C. Berkouwer: *Holy Scripture* (Eerdmans, 1975), Harold Lindell: *The Battle for the Bible* (Zondervan, 1976) がある。今日、論議の中心はやはり聖書の「無謬性」の問題に集まっているように見える。特に一部の英米の若手神学者たちの中には、「無謬性の否定は聖書の重要教理を一つまた一つと放棄させることは必定であるとするいわゆる『リニソ説』的な見方を受け入れることを拒み、伝統的な無謬説の代わりに

「実質的な信頼性」とか、「無謬なのは聖書中の信仰と道徳に直結する部分に限られる」という立場に立って福音主義を標榜しようとする傾向が現われてきている。前掲のビッグルやロチャーズの立場がそれを代表しているものといえる。ヘルカウワーも、一九三八年の *Het Problem der Schriftkritiek* では近代聖書批評学の主観主義的性格の問題をきながらはこぎりした立場をとっていたが、次第に聖書の救済的内容 (heilsinhoud) に、そして最近では聖書の実存的性格 (existentiele strekking) に重きを置くようになつてきている。前掲の英訳本も彼のそうした最近の傾向を示すものといえる。聖書学の分野から書かれた関連文献では Meredith Kline: *The Structure of Biblical Authority* (Eerdmans, 1972) 及び F.F. Bruce: *Tradition-Old and New* (Zondervan, 1974) は「正典性の理解および聖書と伝承の関係について新鮮な光を投げかけてくれる」。

神学関係では、まずアウグスティヌス『三位一体論』(東大出版会、一九七五)の邦訳出現を記憶したい。英国からは James Packer: *Knowing God* (Inter-Varsity, 1973) 及び John Wenham: *The Goodness of God* (Inter-Varsity, 1974) が出版されている。特にウェンハムは、旧約における異教徒の壊滅、悪、地獄の問題について従来の説き方を不十分と考え、より突っ込んだ理解を与えようと試みている。神の選びの漸進な理解を提示しようとするものとして James Daane: *The Freedom of God: a study of election and pulpit* (Eerdmans,

1973) がある。

聖書論・救済論関係では、ウィリアム・バークレー『聖書論』(聖文舎、一九七三) Michael Green: *I Believe in the Holy Spirit* (Eerdmans, 1975), Anthony Hoekema: *Holy Spirit Baptism* (Eerdmans, 1972), Clark Pinnock, ed.: *Grace Unlimited* (Bethany, 1975) などがある。フーケマは「異言、御霊の実、御霊の満たしに関する最近の新ペンテコステ運動の主張を分析批判している。こうでたが、聖霊問題に関する英語文献の便利なリスト」"The Holy Spirit From Pentecost To the Present" by D. Tieder が、昨年五月九日号の *Christianity Today* にのべられている。ビンノック編集の前掲書は「伝統的な『限定的贖罪論』に対して、クリストはすべての人のために死なれたという見解の弁証に主眼を置いている。ここに神学と説教、神学と生活の一体化を鮮やかに証しし続けている Martin Lloyd-Jones の手にある *Romans* を含めたいと思ふ。ただし *Atonement and Justification* (3:20-4:25), *Assurance* (chap. 5), *The New Man* (chap. 6), *The Law* (7:1-8:4), *The Songs of God* (8:5-17, 1974) の五冊が好評のふたつ読書に属する。

教会論の関係では、注目すべきものとして、最近英訳出版された Berkouwer: *The Church* (Eerdmans) がある。

三 倫理・弁証学・現代神学

倫理・学関係のものでは、最初に Carl Henry, ed.: *Baker's Dictionary of Christian Ethics* (Canon, 1973) をあげなくてはならない。今まは手薄であった分野だけに、本書の登場は大きな助けとなる。そのほか Harold Lindell: *The World, The Flesh, and the Devil* (Canon, 1973) 昨年刊行されたものとして、パウロの倫理、自然法、私有財産、悪の問題などを扱った十三論文から成る C. Orlebeke and L. Smedes, ed.: *God and the Good* (Eerdmans, 1975) 状況倫理など最近の倫理説を批判した *Against M. Erickson: Relativism in Christian Ethics* (Baker) 伝統的な婦人観を批判して一つの漸進な見解を提示している Paul Jewett: *Man as Male and Female* (Eerdmans, 1975) がある。厳密な意味では福音派のものと分類できないが、現代の教会にいたく問われている政治・社会倫理に関してその深い学究から多くの示唆を提供してくれる宮田光雄『政治と宗教倫理—現代プロテスタンティズム研究』(岩波書店、一九七五)を加えておきたい。

弁証学に関するものでは、L. Kalsbeek: *Contours of a Christian Philosophy—An Introduction to H. Dooyeweerd's Thought* (Wedge, 1975) 渡辺公平『カルヴァンとカルヴィニストたち』(小峯書店、一九七三) 春名純人『改革派弁証学序説』(西部中会文書委員会、一九七五)が出版されている。福音的

な立場からの歴史観の研究も望まれていた分野の一つであるが、特に George Marsden and Frank Roberts, ed.: *A Christian View of History?* (Eerdmans, 1975). Rousas Rushdoony: *The Biblical Philosophy of History* (Presbyterian and Reformed, 1974) の二著は、基礎的な参考資料であるといえる。最後に現代神学に関するものをいくつか記してみると、まず、現代神学の潮流と問題全体を扱ったものとして G.C. Berkouwer: *Een halve eeuw theologie—motieven en stromingen van 1920 tot heden* (Kok, 1974) がある。日本では一部の間にしか知られていないのが残念だが、オランダのフリー大学で長年活躍された S.U. Zuidema: *Communication and Confutation* (Wedge, 1971) は、現代思想と現代神学の分析書として貴重なもの一つである。特にその実存主義の分析評価には教えられるところが多い。『新解釈学』などいわゆるポスト・ブルトマン時代の神学的展開を分析批判したものとして C. Van Til: *The New Hermeneutic* (Presbyterian and Reformed, 1974) がある。またヴィススロフ『現代神学小史』(このことは社、一九七五)もここに記しておきたい。

(日本基督神学校教授、日本キリスト教短大教授)

ツヴィングリからピューリタンまで

丸山 忠孝

教会史全般にわたる最近の文献を限られた紙面で紹介することはほぼ不可能に近い。そこで、まず最新の教会史事典の紹介の後、筆者の主眼的選択により宗教改革に的を絞る、しかもルター派、急進派、ロマ・カトリックから区別されるリフォームド教会運動に視野を限定してみる。これを時代史的にいえば、リフォームド運動の草分けツヴィングリがチューリヒで改革を始めた頃から十七世紀中期のピューリタン革命までの約一世紀半ということになる。この紹介は、専門家よりはむしろ教会史愛好家一般の理解深化の一助に供する目的のもので、主に最近十年間の文献に注目している。

1 The Oxford Dictionary of the Christian Church; The New International Dictionary of the Christian Church^①

教会史事典(プロテスタント)の分野では、*Herzog-Hauck: Realencyklopädie, The New Schaff-Herzog Encyclopedia, Die Religion in Geschichte und Gegenwart, Evangelisches Kirchen-*

^② *lexikon* などのスタンダードな事典に加えて、この二十年間に主に英米の学者の貢献によるものがいくつかが編纂されている。例えば、F. L. クロスの *The Oxford Dictionary of the Christian Church* (1957) と、主に米国の学者の手になる *The Westminster Dictionary of the Christian Church* (1971) とである。とりわけ、前者は広く利用され、年月の経過に伴い改訂版が望まれていたが、一九七四年第二版の刊行を見るにいたった。

オックスフォードの教会史事典(第二版)は、初版ですでに顯示された英国学者の堅実で高い学風を保持すると同時に、紙面でも一割増の増加により充実し、最新の学説や主要な参考文献も綿密に紹介されている。さらに、初版では軽視されていた分野の東方教会の伝統からも多く新项目が選出され、また英国教会史からの項目と比較して十分代表されているとは言えなかったヨーロッパ大陸や米国の教会史から新项目が加えられている点にも改良の意図が伺われる。いずれにしろ、専門家にとって研究上不可欠の伴侶であろう。

同じく一九七四年に出版された *The New International Dictionary* の方は主に英米の学者の執筆による事典である。項目の執筆者目録には福音主義陣営の学者(しかも米国の学者)が多く名を連ねているところから、本事典は福音主義の教会史における学的水準と関心の所在を明らかにしている。とはいえず、これが党派的作品であるというのではない。むしろ編集者

ダグラスの序文にあるように、包括的な項目選定と公平な記述により二千年のキリスト教会の豊富な伝統を表現しようとする努力が伺われる。しかしながら、本事典の狙いは「学術資料と初步的紹介との中間を行く記述」にあるところから、オック・スフォードの事典の持つ高度に学術的で煩瑣な分析を極力避け、参考文献も手頃な英文のものを主体的に載せている反面、簡単に過ぎることなく総括的な記述を範としているようである。このため、全般的に明瞭で理解しやすい事典であるといえよう。本事典の難点といえば、項目の執筆者が必ずしもその分野の専門家ではないことや、編集陣や出版社の校閲不足のためか、かなりのミスが目につくこと、またラテン語の引用やフランス語のアクセントの不徹底などであろう。しかし、全体として、専門家にも愛好家にも活用されうる事典である。

二 著作集・文献一覧・伝記

(ツヴィングリ、ブーツァー、プリンガー、カルヴァン、ペーズ)

宗教改革者に関する最近の文献は多岐・多様にわたるので、ここでは、研究の基礎的助けとして、根本資料の著作集（全集、選集、書簡集など）、文献一覧、伝記に限りその五名の改革者に関し最近の文献を紹介する。

(1) ツヴィングリ

の三部から成立し、第一部は一九六〇年より、第二部は一九五四年より逐次出版され、現在まで十余巻の刊行を見ている。この他、従来ブーツァーの著作は訳本も少く研究者にとって入手困難でもあったが、最近一、二の英訳も現れている。ルターとカルヴァンとの間に重要な位置を占めるストラスブルクの改革者、ブーツァーの研究が今後日本でも発展することが望まれよう。

文献一覧に関しては、基本的なものとしては一九五〇年代のR・シュトゥペリツヒとB・トンブソンの小論があるが、この十年程あまり見るべきものがない。シュトゥペリツヒは出版されたブーツァーの著作・書簡目録とかなりの参考文献を手がけ、トンブソンは一九一八年から三十年あまりの参考文献に批評的コメントを加えている。伝記の分野でも、スタンダードなG・アンリツヒ、H・エリス、A・エリクソン、F・ヴァンデルなどの作品を凌駕するものは最近見あたらない。

(3) プリンガー

チューリヒ宗教改革におけるツヴィングリの後継者プリンガーの重要性が従来十分には認識されていなかったのは、根本資料の入手困難さが一つには原因していた。プリンガー自身が十巻に編集したにもかかわらず出版されずに終わった主要著作集（現在、チューリヒ中央図書館蔵）、エリザベス王朝時代に多く輩出した英訳本、十九世紀ケンブリッジのパーカー協会の編纂

ツヴィングリ全集は『宗教改革者全集 (Corpus Reformatorum)』のメランヒトン、カルヴァンに次ぐ第三部として一九〇四年から出版され現在も続刊中である。選集はツヴィングリの主要著作を全十一巻に収める計画で一九四〇年よりチューリヒにて編纂され、現在まで八巻以上の刊行を見つつ続刊中である。

文献一覧に関しては、初版から六十余年後の一九六二年に再版されたG・フィンズラーの作品とB・トンブソンの網羅的な小論に加え、先年U・ゲイブラーが二十世紀のツヴィングリ研究の包括的紹介を試みている。この作品はその第一部で、ツヴィングリの改革がルターから独立したものであったことを立証し、第二部で、フィンズラーを継承して、一八九七年から一九七二年までの文献約千六百を網羅したものである。

W・ケーラーやO・ファーナーなどすでに代表的作品が多い伝記の分野での最新のものは、チューリヒ大学教授F・ブュサーの作品であろう。これは百頁あまりの小品であり、神の言の預言者としてのツヴィングリの姿勢をテーマにその生涯を浮き彫りにしている。

(2) ブーツァー

ストラスブル大学神学部により編纂事業が進められているブーツァー全集は第一部の『ドイツ語著作集』（九巻）、第二部が『ラテン語著作集』（一六巻）、第三部が『書簡集』（約六巻）

になる『書簡集』や『五十の説教集』、また今世紀初頭E・エグリにより出版された『年譜』などの根本資料も十分にプリンガー研究を広めたとはいえない。しかしながら、一九六五年にチューリヒ大学にスイス宗教改革研究所が開設され、プリンガー全集の編纂事業に着手した。全集は文献、書簡、神学者、ヒストリオグラフィの四部から構成され、すでに原典刊行物の文献一覧（第一部、第一巻）と初期書簡（第二部、第一巻）などの出版を見ている。特に、プリンガーが発信・受理した書簡は実に一万二千通以上にのぼり、宗教改革時代でも最大の書簡集の一つとなるであろう。この全集刊行を契機として、ルター、メランヒトン、ブーツァー、カルヴァンと並んで宗教改革時代の重要人物で、かつ英国宗教改革の貢献者プリンガーの研究が発展することは必定であろう。

伝記に関しては、代表作としてはC・ペスタロッツの前世紀の作品、近代批評学的研究の端緒といわれるF・ブランケの小品、プリンガーの書簡から改革者の姿をとらえたH・ブーヴィエーの作品などがあるが、その他、初期の神学形成を主に初期未刊行資料から分析したJ・シュテッケ、キリスト論的アプローチから分析したG・ロッハー、英国教会との関連からプリンガーを捉えたD・キープの最近の作品も伝記的研究には欠かせない。

(4) カルヴァン

基本的原本資料は、『宗教改革者全集』の第二部『カルヴァン全集』全五九巻とP・バルトとW・ニーゼル共編の『カルヴァン選集』全五巻の外に、全集には含まれなかった説教のために *Supplementa Calviniana* が計画され、サムエル後書、イザヤ書、ミカ書、エレミヤ書、哀歌などの説教が継続出版されている。訳本資料では、エディンバラのカルヴァン著作集刊行会編の聖書註解四六巻（一八四三—一八五五）をはじめ古い訳出版が最近数多く重版されている反面、O・ヴェーバーの編集で始められた独訳、D・W・とT・F・トールランス共編による新英訳の新約註解十二巻、本邦のカルヴァン著作集刊行会編の聖書註解、台湾の宗教改革刊行会が最近着手した新約註解など豊富な資料が新たに提供されている。このほか、『キリスト教綱要』のみに限定しても、フランス語版『綱要』（一五六〇）がJ・D・ベノワにより批評学的に編纂され、訳本でもバルト・ニーゼル版をそれぞれ底本としてO・ヴェーバーによる改訂版独訳、長く親しまれたH・ベバレッツとJ・アレンの訳本をはるかに凌駕したマクニール・バトルスによる英訳版、新邦訳（渡辺訳）などがあり、また近年、初版『綱要』（一五三六）がF・L・バトルスにより最初の英訳を見た。

すでに秀作の輩出を見た伝記の分野では、この十年あまりオリジナルなものは見当らないようである。しかし、最近とくに顕著な分野は、尨大・多岐にわたるカルヴァン研究の概観を捉えるために必要不可欠となった文献一覧であろう。この分野

シャ語テキストの成立にも功あつたベーズの聖書註解や説教集、またベーズが生前少くとも五回改訂し心血を注いだ尨大な『新約聖書註釈』などはこの文献一覧には含まれていない。さらにベーズ研究の参考文献一覧もいまだ完備されていないため、今後の成果が期待される。伝記に関しては、前世紀の作品はいくつかあるが、今世紀ではP・F・ガイゼンドルフの作品が代表的で、最近特筆すべきものは現われていない。

三 カルヴィニズムと社会変革思想

カルヴァンから十七世紀のピューリタン革命までのリフォーム運動に関する資料・参考文献の出版は最近顕著であるが、とりわけ、それらの中で目立つテーマとして、社会変革のイデオロギーとしてのカルヴィニズムがあるように思われる。このテーマは古くはM・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（一九〇四—一五）に提示されたが、その後、A・ビュレーなどによりカルヴァン研究において定着し、W・ハラレーやC・ヒルなどの代表的ピューリタン学者間でも一般化され、近年M・ウォルツァーによりこの分野での重要視点の一つとして確立されるにいたった。一例として、リフォーム運動のいくつかの側面においてこれを捉えてみる。

(1) ジョン・ノックス

プロテスタントにとっては暗黒時代であつたメリー女王の治

は、六〇年振りの一九六〇年に再版を見たA・エリックソンやE・G・レオナルド、J・T・マクニールなどの初期の作品を経て、一九六一年のニーゼルの文献集にいたり大きく進展を遂げた。ニーゼルの作品は一九〇一年から一九五九年までの一五〇〇余の文献を番号を付して網羅した画期的なものであつたが、情報の不正確さや誤植のため改版の必要が感ぜられていた。このため、P・フランケルの補足作品から、カルビン神学校のタイレンダとデ・クラークによる一連の小論や南ア連邦のD・ケンプが一九五九年から一九七四年までの文献を集めた最新の作品にいたるまで、それ以降の作品はニーゼルの文献集に對し補足・追加の性格をもっている。

(5) ベーズ

カルヴァンの後継者ベーズの研究とは、ベーズ自身の編纂になる『神学論集』三巻（一五七〇—一五八二）が今日でも原典資料として不可欠である。ベーズの著作の中でも『信仰告白』など二、三の例外を除いて大半は十六世紀の原本の型でしか研究者の手に入らない。しかし、ジュネーブの宗教改革史博物館は秀れた原典確立と註釈で知られる『ベーズ書簡集』の刊行に着手し、一九六〇年の第一巻から今年予定される第八巻まで発刊事業は進展している。

文献一覧に関して言えば、F・ガーディの作品が根本資料の主要なものを網羅しているが、一流の新約学者であり新約ギリ

世（一五五三—一八）は英国から多数の亡命者をヨーロッパ大陸に追いやった。スコットランドの改革者ノックスは中でも著名であつたが、最近彼の急進的政治思想が注目を集めている。この傾向はR・M・キングドンのもから最新のD・シヨアの作品までに広く認められるが、最近のノックス伝の中でも特に權威あるJ・リドレーやW・J・S・リッドの作品によく反映されている。これらの作品によれば、ノックスは同時代のカルヴィニストの中でも急進的政治理論の持ち主であり、彼の影響は後のピューリタン革命にも見られる。

(2) ユグノー

フランスのカルヴィニストの政治理論は一五六二年から一五九八年まで延々と続いた宗教戦争という歴史的過程の中で発展した。ユグノーの政治理論の基礎には、カルヴァンの他にはF・オートマンの『フランコ・ガリア』（一五七三）やベーズの『為政者の権利』（一五七四）などがあつた。これらの著作は近年新たな編纂により資料としての利用度を高め、またいくつかの参考文献も出版されている。格別、一九七二年には「サン・バルテルミー祭日の虐殺」（一五七二）とその渦中殺害されたユグノーの最高司令官G・コリニの四百年記念に際する学術会議がいくつか開催され、それらの記念出版物も現われ、またサン・バルテルミーをより厳密に歴史的に評価せんとする作品も多く見られる。また、この時代のリフォーム運動一般に関

してではあるが、「宗教改革」と「革命」との関連が注目されているのも興味が深い。

(3) ビューリタン

十六・十七世紀のビューリタニズムのイメージはこの数十年間に敬虔主義的で古臭い運動からダイナミックで斬新な変革へと大きく換えられたものもめずらしい。ビューリタニズムの斬新さの一因はその革新的政治理論とその根底にある「神を畏れる国家」の形成という神学的理念との調和があろう。ビューリタニズムの再解釈に重要な貢献をしたP・ミラーはこの点を契約理念より導き出し、神と人、人と人との間の契約の調和と見なし、先述のハラーは宗教的熱心さと社会変革との相關関係とし、ヒルは宗教的色彩の強い階級闘争として捉え、ウォルツァーは「聖徒の革命」と呼んだ。最近の文献の多くも、ビューリタニズム全般におけると同時に、クロムウェルやミルトンなどの急進的ビューリタンにおける社会変革の理念が強調されているように思われる。

注

- ① *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, eds. F.L. Cross & E.A. Livingstone, 2nd ed. London: Oxford, 1974; *The New International Dictionary of the Christian*

フォードの教会事典をはじめ本邦の『キリスト教大事典』なども同じ誤りを踏襲している。(p. 177) *Psychopamychia* は一五三四年に書かれたが、その出版が同年の十二日(『サレマン全集』の編者の説)は最近の多くの著書によつて誤りられ一五四二年刊行説が有力である。また初版『提要』は十章ではなく六章から成る。

- ⑨ *Huldreich Zwinglis Samtliche Werke. (Corpus Reformatorum LXXXVIIII)* Leipzig: Heisius, 1904 ff; *Zwingli Hauptschriften*. Zürich: Zwingli-Verlag, 1940 ff.

- ⑦ G. Finsler, *Zwingli Bibliographie*, 2nd ed. Nieuwkoop: De Graaf, 1962; B. Thompson, "Zwingli Study since 1918," *Church History* XIX (1950), 116-128; U. Gäbler, *Huldreich Zwingli im 20 Jahrhundert*. Zürich: Theologischer Verlag, 1975.

- ⑧ W. Köhler, *Huldrych Zwingli*. Leipzig: Koehler & Amelang, 1954²; O. Farnet, *Huldrych Zwingli*, 4 vols. Zürich: Zwingli-Verlag, 1945-60; F. Büsser, *Huldrych Zwingli*. Göttingen: Musterschmidt, 1973. また本邦初の通記である出村謙『ハンペンベール』教団出版局、一六七四の半の紹介書がある。

- ⑥ *Martin Butzers Deutsche Schriften*. ed. R. Stupperich et al. Güttersloh, 1960 ff; *Martini Buceri opera latina*. ed. F. Wendel et al. Paris-Güttersloh, 1955ff. W. Pauch ed.,

Church. ed. J.D. Douglas. Grand Rapids: Zondervan, 1974.

- ② *Relencyklopädie für protestantische Theologie und Kirche*. eds. Herzog-Hauck, 3rd ed. Leipzig, 1896 ff; *The New Schaff-Herzog Encyclopedia of Religious Knowledge*. ed. S.M. Jackson. New York: Funk & Wagnalls, 1907;

Die Religion in Geschichte und Gegenwart. ed. Galling. 3rd ed., Tübingen, 1957 ff; *Evangelisches Kirchenlexikon*. eds. Brunotte-Weber. Göttingen, 1956 ff.

- ③ 例えは「オキンス・ホークの事典」の比較でいう「Billy Sunday, "J. Orr," "A.A. Hodge," "B.B. Warfield," "J.G. Machen" などの新項目が見出される。

- ④ 例えは「同じ比較でいう」"Buddhism," "Hinduism" など。オキンスの創始者 "Joseph Smith" 日本の無教会運動の "K. Uchimura" などの新項目が登場する。

- ⑤ "T. Beza" (p. 126), "H. Bullinger" (p. 165), "J. Calvin" (pp. 177-9) の三例に限る。

(p. 126) *Haereticis... Puniendus* → *De haereticis... puniendis; Codex Claromantius* → *Codex Claromontanus; De jure Magistratu* → *De jure magistratum*. 一五八〇年の『ハンペン・リッホーゲン教会法』が「ズ」の影響を受けた書かれたが、彼の作品と言ひ難い。(p. 165) ブリンハーの誤称 "Johann" を加へ "Johann Heinrich Bullinger" とするは歴史資料に基づかなかつ誤謬である。オキンス

Melanchthon and Bucer (Library of Christian Classics XIX) Philadelphia: Westminster, 1969; Martin Bucer, *Common Places of Martin Bucer*. tr. & ed. D.F. Wright. Appleford: Sutton Courtenay, 1972.

- ⑨ R. Stupperich, *Bibliographia Buariana* (Schriften des Vereins für Reformationsgeschichte 169) Güttersloh: Bertelsmann, 1952; B. Thompson, "Bucer Study since 1918," *Church History* XXV (1956), 63-82. 書名を誤り D.F. Wright tr. & ed., *op. cit.* の誤りと錯つる。

- ⑩ G. Anrich, *Martin Bucer*. Strasbourg: Trubner, 1914; H. Eells, *Martin Bucer*. New Haven: Yale, 1931; A. Erichson, *Martin Bucer*. Strasbourg: Société pastorale, 1951²; F. Wendel, *Martin Bucer*. Strasbourg: Société pastorale, 1951.

- ⑫ *The Zurich Letters*. tr. & ed. H. Robinson, 2 vols. Cambridge: Parker Society, 1842, 1845; *The Decades*. 4 vols. Cambridge: Parker Society, 1849-52; *Heinrich Bullingers Diarium (annales vitae) der Jahre 1504-1574*. ed. E. Egli. Basel, 1904; *Zwingli and Bullinger* (Library of Christian Classics XXIV) tr. & ed. G.W. Bromley. Philadelphia: Westminster, 1953.

- ⑬ H. Bullinger, *Werke. Erste Abteilung: Bibliographie; Bd. 1: Beschreibendes Verzeichnis der gedruckten Werke*.

ed. J. Staedke. Zurich: Theologischer Verlag, 1972; H. Ballinger, *Briefwechsel*; Bd. 1: *Briefe der Jahre 1524-1531*. eds. U. Gäbler & E. Zinzely. Zurich: Theologischer Verlag, 1973.

- ⑤ K. Pestalozzi, *Leben und ausgewählte Schriften der Vater der eformierten Kirche* V (H. Ballinger) Leipzig, 1858; F. Blanke, *Der junge Bullinger, 1504-1531*. Zurich: Zwingli-Verlag, 1942; H. Bouvier, *Henri Bullinger*. Neuchâtel, 1940; J. Staedke, *Die Theologie des jungen Bullingers*. Zurich: Zwingli-Verlag, 1962; G.W. Locher, "Praedicatio verbi Dei est verbum Dei. Ein Beitrag zur Charakteristik der Theologie Heinrich Bullingers," *Zwingliana* X (1954), 47-57; D.J. Keep, *Henry Bullinger and the Elizabethan Church*, 1970.

- ⑥ *Ioannis Calvini opera quae supersunt omnia*. eds. G. Baum, E. Cunitz, E. Reuss et al. (*Corpus Reformatorum* XXIX-LXXXVII), Brunswigae, 1863-1900; *Joannis Calvini opera selecta*. eds. P. Barth & W. Niesel. 5 vols. Monachii, 1926-52; *Supplementa Calviniana*. vols. I, II, V, VI. Neukirchen: Neukirchener Verlag, 1961-1971.

- ⑦ *Auslegung der Heiligen Schrift*. Neue Reihe. ed. O. Weber. Neukirchen: Erziehungsverein, 1937ff; *Calvin's New Testament Commentaries*. eds. D.W. Torrance &

T.F. Torrance, 12 vols. Grand Rapids: Eerdmans, 1959-72. 本書は諸邦に跨るる大著述であるが、台紙の中国語翻訳は「ローザ」の「ヤ」の字の誤植を認むるに止るのみである。

- ⑧ *Institution de la religion chrestienne*. ed. J.-D. Benoit, 5 vols. Paris: J. Vrin, 1957-63; *Unterricht in der christlichen Religion*. ed. O. Weber. Neukirchen: Erziehungsverein, 1963; *Calvin: Institutes of the Christian Religion*. ed. J.T. McNeill, tr. F.L. Battles (Library of Christian Classics XX-XXI) Philadelphia: Westminster, 1960; *Institution of the Christian Religion... Now Englished for the first time*. tr. F.L. Battles. Pittsburgh: Pittsburgh Theological Seminary, 1972. 本著は「ヤ」の「ヤ」の字の誤植を認むるに止るのみである。

- ⑨ A. Erichson, *Bibliographia Calviniana*. (reprint of 1900) Nieuwkoop: De Graaf, 1960; E.G. Leonard, "Bibliographie Calvinienne abrégée," *Revue de théologie et d'action ecclésiastique* III (1943) 405-24; J.T. McNeill, "Thirty Years of Calvin Study," *Church History* XVII (1948), 207-240; W. Niesel, *Calvin-Bibliographie, 1901-1959*. München: Kaiser, 1961.

- ⑩ P. Fraenkel, "Petit supplément aux Bibliographies Calviniennes 1901-1963," *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance* XXXIII (1971), 385-412; J.N. Tyenda, "Calvin

Bibliography 1960-1970," *Calvin Theological Journal* VI

- (1971), 156-193; P. De Klerk, "Calvin Bibliography 1972," *ibid.* VII (1972), 221-250, "Calvin Bibliography 1973," *ibid.* IX (1974), 38-75, "Calvin Bibliography 1974," *ibid.*, 210-240, "Calvin Bibliography 1975," *ibid.* X (1975), 175-207; D. Kempff, *Bibliography of Calviniana, 1959-1974*. Potschefstroom: Institute for Advancement of Calvinism, 1975.

- ⑪ T. Beza, *Tractationes theologiae*. 3 vols. Geneva, 1570-82; *La confession de foi du chrétien, par T. de Bèze*. ed. M. Reveillaud. Saint-Germain-en-Laye, 1955.

- ⑫ *Correspondance de Théodore de Bèze*. eds. F. Aubert, H. Meylan, A. Dufour et al., I-VIII. Geneva: Droz, 1960-76.

- ⑬ F. Gardy, *Bibliographie des oeuvres. de Théodore de Bèze*. Geneva: Droz, 1960.

- ⑭ P.-F. Geisendorf, *Théodore de Bèze*. Geneva: Labor et fides, (1949).

- ⑮ A. Biéler, *La pensée économique et social de Calvin*. Geneva: Librairie de l'Université, 1959; W. Haller, *The Rise of Puritanism*. New York: Columbia, 1938; C. Hill, *Society and Puritanism in Pre-Revolutionary England*. London: Seeker & Warburg, 1964; M. Walzer, *The Revo-*

lution of the Saints. Cambridge, Mass.: Harvard, 1965.

- ⑯ R.M. Kingdon, *Geneva and the Coming Wars of Religion in France, 1555-1563*. Geneva: Droz, 1956; D. Shaw ed., *John Knox: Quartercentenary Reappraisal*. Edinburgh: St. Andrew, 1975; J. Ridley, *John Knox*. New York-London: Oxford, 1968; W.S. Reid, *Trumpeter of God: a Biography of John Knox*. New York: Scribners, 1974. 本書は「ヤ」の「ヤ」の字の誤植を認むるに止るのみである。

- ⑰ F. Hotman, *Francogallia*. Latin text by R.E. Giesey, tr. J.H.M. Salmon. Cambridge: University Press, 1972; D.R. Kelly, *François Hotman: A Revolutionary's Ordeal*. Princeton: University Press, 1973. T. Beza, *De iure magistratum*. ed. K. Sturm. Neukirchen: Erziehungsverein, 1965; *Du droit des magistrats*. ed. R.M. Kingdon. Geneva: Droz, 1971. 本書は「ヤ」の「ヤ」の字の誤植を認むるに止るのみである。

- ⑱ A. Soman ed., *The Massacre of St. Bartholomew: Reports and Documents*. Den Haag: Nijhoff, 1974; *Actes de Colloque d'Admiral de Coligny et son temps, tenu à Paris du 24 au 28 octobre 1972*. Paris: Soc. de l'histoire du Protestantisme, 1974; D.R. Kelly, "Martyrs, Myths, and

Massacre: the Background of St. Bartholomew," *American History Review* LXXVII (1972), 1323-42; N.M. Sutherland, *The Massacre of St. Bartholomew and the European Conflict 1559-1572*. New York: Barnes & Noble, 1973; I. Mielek, "Bartholomäusnacht als Forschungsproblem. Kritische Bestandsaufnahme und neue Aspekte," *Historische Zeitschrift* 216 (1973), 74-110.

⑧ Cf. R.M. Kingdon ed., *Transition and Revolution: Problems and Issues of European Renaissance and Reformation History*. Minneapolis: Bargess, 1974.

⑨ P. Miller, *The New England Mind: the Seventeenth Century*. New York: Macmillan, 1939.

⑩ T. Liu, *Discord in Zion: The Puritan Divines and the Puritan Revolution 1640-1660*. Den Haag: Nijhoff, 1973; C.R. Elton, *Policy and Police: the Enforcement of the Reformation in the Age of Thomas Cromwell*. Cambridge: University Press, 1972; C.P. Kott, *Cromwell and the New Model Foreign Policy*. Berkeley: University of California, 1974; H.M. Richmond, *The Christian Revolutionary: John Milton*. Berkeley: University of California, 1974; A. Woolrych, "Milton's Political Commitment: The Interplay of Puritan and Classical Ideals," *Wasara Review* IX (1974), no. 1.

編集後記

日本福音主義神学会は地道に歩み続けて七年目になります。今春の総会で機構上の大きな変更が承認され、この七月から全国理事会の下に、関東部会と関西部会とに分かれて活動を展開することになりました。

ところで、本誌の編集には二年前から関西部会を代表して春名純人氏に加わり、関西部会の活動をできるだけ誌面に反映してまいりましたが、本号では、論文各一本、書評各五篇と、論文ならびに書評に関しては関東・関西両部会のバランスが完全にとれております。ただし、文献紹介の四篇は、関東部会関係の執筆者にかたよりました。それは関東部会からの編集者が二人とも今春改選されたため、春名氏と事前の打ち合せが十分にできなかったためでありまして、次号からは当然改められるでしょう。

文献紹介でナグ・ハマディ文書の研究状況を報告くださった永田竹司氏は、東京キリスト教学園短期大学を卒業して米国に留学し、現在プリンストン大学神学部博士課程に在学中の若い学究です。福音主義の信仰に立つ新進気鋭の研究者が続々と起こされることを願ってやみません。

今春改選された関東部会からの編集者は津村俊夫氏と小生の二人です。小生は牧師が本業の素人研究者にすぎませんが、春名純人氏と津村俊夫氏のお二人は前途を嘱望された専門の研究者でいらっしやいます。このお二人の熱意あふるる協力によって、次号から一層の内容の充実と向上を期することができましよう。

(村瀬俊夫)

昭和五十一年十月三十日発行 頒布価 九〇〇円

編集者

村瀬俊夫
春名純人
津村俊夫

発行者

東京都東久留米市氷川台一ノ
八ノ一五 日本基督神学校内
日本福音主義神学会

印刷

いのちのことば社印刷部

発売 いのちのことば社